

成島柳北『新柳情譜』二編評釈

高橋昭男

凡例

一、底本には、『花月新誌』第七十九号（明治十二年八月十三日発行）から第九十号（明治十三年二月二十九日発行）まで十二回にわたり連載された「新柳情譜」二編を使用した。

一、翻刻にあたっては次のような方針で行なった。原文は漢文であるが、送り仮名、返り点がほどこされているので、煩雑を避けるため、原文を訓読文にしてある。ただし、漢字表記は通行の字体を用いた。

一、七言絶句は原文では、送り仮名、返り点がほどこされているが、原詩から送り仮名、返り点をはずし、字体は旧字とし、別に訓読を付した。

一、欄外の頭評には、送り仮名、返り点はないので、旧字の原文通りとし、訓読を付した。

一、頭評には①のような番号を付し、対応する本文にも①のように付した。

一、難読漢字にはルビを付した。

一、すべての訓読文に、現代語訳を付した。

新柳情譜二編

澤上漁史戯稿
秋風道人漫評

阿山（新橋）七十九号

湖山翁、詩有り、云ふ。「少年、少に非ず、老、老に非ず、一種の風^{ふう}半^{はん}、一段の情^{じやう}」^①。この句、酷^{こつ}だ阿山その人に肖^にたり。阿山、年紀、未だ老いず。而して人、老校書^{こうしやう}と呼び倣^なす。蓋し、其の性の恬淡^{てんたん}、実なるを以てなり。然れどもその宴に侍する、善く飲み、善く談じ、客をして倦まざらしむ。亦た凡種に非ず。友人鉄腸、平生、妙齡の妓^かを喜^{よろこ}ず。酒を新橋に飲む毎に、招く所、島次に非ざれば、則ち阿山なり。余、阿山を識る、既に五六年。未だ嘗て醜聞を耳にせず。

猫みけねこ猫道人の狡さく猎を以てすと雖も亦たその破綻を窺ひて、これを鑽刺する能はず、と云ふ。

一雨殘春啼子規 一雨 殘春 子規啼く

小樓好是把吟卮 小樓 好し是れ 吟卮ぎんしを把る

綠陰風露淒清地 綠陰の風露 淒清の地

却與吾人物色宜 却つて吾人と物色宜し

評に云ふ。余、曾て金瓶梅を読み、西門慶、孟玉楼を娶る。玉楼、時に三十二歳。風度婉約、瓶児、金蓮の上うへに在り。見るべし、老妓、固より軽んずべからず。鉄腸子、少年勇銳、筆力鼎なべを打ぐ。識見老成、その阿山を愛する、果して見、有るなり。

○湖山翁こせう漢詩人の小野湖山。大沼枕山・鱸松塘とともに明治の三詩人と称された。○風丰ふうふう風貌に同じ。○校書ぎょうしよ本来は書物の校閱をすることであるが、唐代の芸妓・蘆濤ろたうが詩人・元稹げんしんのために校書の役をした故事から、芸妓の別名となった。○恬淡てんたん心が静かである。心がさっぱりしている。○友人鉄腸てつちやう『朝野新聞』の記者、末広鉄腸。柳北の刎頭の友。○妙齡めうれい若い。とくに女性に用いる。○島次しまじ『新柳情譜』初編に記載された新橋の芸者。○猫猫道人みけねこだうじん猫好きで知られた仮名垣魯文の号。○鑽刺せんし鑽は切るの意。とどめを刺す。○吟卮ぎんし詩を吟じ、酒を飲む。○淒清せいせい物静かで悲しいさま。○物色ぶつしきありさま。景色。○『金瓶梅』中国四大奇書の一。明代万曆年間の長編小説。官吏西門慶の好色一代記。○孟玉楼もうりく西

門慶の第三夫人。○風度ふうどなりふり。威儀態度。○婉約わんやくしとやかで、控え目なこと。○瓶児びんじ西門慶の第六夫人・李瓶児。『金瓶梅』の瓶。○金蓮きんれん西門慶の第五夫人・潘金蓮。『金瓶梅』の金。悪女で副主人公格。○扛鼎かうていかなえをあげる。力の非常に強いこと。『史記・項羽紀』「籍長八尺餘、力能扛鼎」。現代語訳

お山(新橋)

湖山翁の詩に次のような句がある。「少年だからといって必ずしも若いとは言えず、老人だからといって必ずしも老いているわけではない。いわばその人の風貌と、人としての味わいによつて決まるのだ」。翁の言葉は、お山の人柄を髣髴とさせる。お山はそれほど歳をとっているわけではないのに、世人は年増芸者と言いふらしている。おそらく彼女の性格が物静かで落ち着きがあり、きちんとしているからであろう。とはいえ、宴席に侍るや、よく飲むし、話し上手で客を退屈させないから、際だっているのだ。我が友の末広鉄腸は、ふだんから若い芸者を席に呼ぼうとしない。新橋で飲むときは、島次が来られなければお山を呼ぶ。私がお山を呼ぶようになってから五、六年になるが、とんと浮いた話を聞かない。あのわけ知りの魯文先生がいくら探しても、お山の言動にポロを見つけたことがなく、お手上げということだ。

一雨が来て春もおわりに近づき、ほととぎすが啼いている家でくつろいでいると、思わず盃に手が伸び詩を吟じている

新緑の樹々にあたる風と露はつめたく清らかで

だからこそこうした春景色が、私の心情と響きあつてまことに心地よい

評に云う。私はむかし『金瓶梅』を読んだことがあるが、西門慶が孟玉楼を妻に迎えたくだり。玉楼はそのとき三十二歳。見るからにしとやかで、李瓶児や潘金蓮より年上であつたそう。だからこそ見習いなさい。年増芸者だからといって決してあなどつてはいけません。鉄腸君は歳は若い、どうしてまことに頼もしい。文章を書かせては説得力が大いにあり、物事の認識力は老成しているがごとくである。だから、お山を愛すること、まことに見識があるといつてよい。

頭評

①不圖湖翁知此間情味老人可畏

図らずも湖翁、この間の情味を知る。老人、畏るべし。

②鐵腸子不喜妙齡大是達見然余恐其不喜者特筵席耳

鐵腸子、妙齡を喜す。大いに是れ、達見たり。然るに余、その喜ざるは特り筵席なるを恐るるのみ。

現代語訳

①湖山翁は思いがけなくも、人の心のあり方を言い当てておられる。ただ湖山翁に感服するのみである。

②鉄腸君が若い芸者を席に呼ぼうとしないのは、まことに達見であ

る。しかし、若い芸者を喜ばないのは、ただ宴席だけのことなのを恐れるばかりだ。

甚吉（柳橋）

柳橋の粉墨、老将の善く兵を用ふる者は誰と為す。曰く、甚吉、是れなり。賓客満堂、杯盤狼藉、甲笑ひ、乙罵り、衆妓周章、措を失ふの際、老将軍、独り左顧右眄。雛鬢を駆使し、少妓を鼓舞し、己れ自ら率先奔馳し、客、酒を呼べば酒臻り、絃を促せば絃鳴る。是れ他人の弁ずる能はざる所。①而して甚吉独りこれを弁ず。多多益す弁ずる者、独り衆を用ひざるなり。而して本地の女將、甚吉と旗鼓相当り、敢て寸歩を譲らざる者は、龜吉なり。余、龜吉を譜に上ぼさず、人皆これを怪しむ。噫、余の亡兄、墓阡、草新たなり。余、龜吉を見る毎に、猶ほ洟々涙下る。何ぞこれを譜するに忍びん。故に甚吉に授くるに元帥の印綬を以てせざるを得ざるなり。②

軟紫嬌紅春作團 軟紫 嬌紅 春 團を作すも

摧殘至竟不堪看 摧殘 至竟 看るに堪へず

遲遲澗畔喬松樹 遲遲 澗畔の喬松樹

老幹憐他耐歲寒 老幹 憐れむ 他が歲寒に耐ふるを

評に云ふ。文陣筆墨、百万の兵甲、其の指揮に従ふ。夫人城娘子軍、向かふ所、披靡す。漁史胸中の奇、出るとして其の妙を極めざる無し。真に文壇の飛將なるかな。

○粉墨 粉は脂粉。墨はとりで。花街を戦場になぞらえる。○老将 老練な芸者。○兵 若い芸者。○杯盤狼藉 蘇軾・前赤壁賦「肴核既盡 杯盤狼藉」。○周章 ちりみだす。○失措 ちりみだす。○左顧 右眈 あたりを見回すさま。右顧左眈。○臻 いたる。とどく。ゆきわたる。○弁 処理する。○多多益弁 多ければ多いほど、ますますうまく処理する。手腕や才能にゆとりがある。○本地 当地。○旗鼓相当 両軍が敵対する。勢力が互角であること。○亡兄 楠山孝三郎。おそらく楠山は亀吉の馴染みであったのであろう。○墓阡 墓道。○涔涔 涙や汗のさかんに流れ出るさま。○軟紫嬌紅 春の花々になぞらえた若い芸者たち。○摧殘 くだき、のこる。破壊する。○至竟 結局。つまり。○遲遲 どのかなさま。○澗畔 谷川のほとり。○喬松樹 論語・子罕第九「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也（子曰わく、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後ることを知る也）」。○文陣筆墨 文学界。文壇。本文冒頭の粉墨に対応している。○兵甲 兵士。○夫人城娘子軍 前秦に攻め込まれた東晋が、襄陽の守備の際、宮女たちで壘を守った故事。ここでは花街の女性たち。○披靡 兵士が敵に圧倒され、道を開きなびくさま。○飛将 名将。前漢の李広は飛ぶように素早く行動したので、敵の匈奴が「飛将」と呼んだことによる。

甚吉 (柳橋)

柳橋の花街で、若い芸者をうまく使いこなせる練達の女将は誰か

といえば、甚吉を置いて他にはいないであろう。宴会場は客があふれ、盃が飛んで大騒ぎ。大笑いする客、罵声を浴びせる客、収拾がつかなくなつて若い芸者は大あわてで、どうしていいかわからない。そこへ修羅場をくぐってきた練達の姐さんがあらわれるや、あたりを平然と見回し、若い芸者たちを使いこなして叱咤激励し、自らも座敷を動き回つて、客が酒をもつてこいと言えば銚子をとりよせ、三味線を弾けと求められれば、すぐに絃歌がはじまる。これは他の姐さんにはちよつと出来ないことだ。つまり甚吉だけが場を収めることが出来るのだ。こうして仕切り上手な芸者は、自分一人で仕切り、他の手を借りようとはしない。そこで柳橋の芸者連中のなかで甚吉と同等の実力を備え、ヒケをとらない者といえば、亀吉だろう。私は、亀吉をこの「新柳情譜」に載せなかつた。このことがどうも不審を招いているようなのだが、私の亡き兄が墓に入ったばかりなので、亀吉を見るたびに今でも涙が溢れてくるのだ。だからこそ、亀吉をこの「情譜」に載せるに忍びないのだ。したがって、甚吉には、將軍の称号よりも元帥の地位を与えるべきなのかもしれない。

春の花盛りのような若い芸者たちが群をなしているがやがては色はあせ老いさらばえて看るに堪えなくなるそこへいくと川のほとりの大きな松の樹は悠然としてじつと寒さに耐えているので、その姿に感じ入る

評に云う。文壇の形勢を見るに、大方は柳北君の筆に勝るものはない。花街の女性たちも、筆のおもむくまま、見事に描かれている。柳

北君の文才の素晴らしきは、女性たちの魅力のすべてを引きだしている。まさに柳北君は文壇の名将といつても差し支えない。

頭評

①筆如風雨何等捷疾所謂如脱兎者
筆は風雨の如く、何等の捷疾。所謂脱兎の如き者。

②以不説説之風致閒遠再讀益覺妙

説かざるを以てこれを説く。風致、閒遠にして再読すればますます妙を覺ゆ。

③好結局

好い結局。

○捷疾Ⅱすばやい。○風致Ⅱ人のようす。おもむき。おもしろみ。

○閒遠Ⅱ時間を経ること。

現代語訳

①筆の運びは、吹きしきる風雨のごとく何という疾走感だろう。よく言う、脱兎の如しだ。

②説明していないようで、分るように表わしている。すこし時間をおいて再読すると、面白味が倍加する。

③好い結末だ。

小園（新橋）第八十号

古人云ふ、「千金、笑を買ふ。曾て辞せず」と。蓋し美人の笑ひ、此の如くそれ貴きなり。小園、笑を好まず。容姿端肅、狹斜の人に似ざるなり。然れども園や敢て笑はざるにあらず。笑ふべきの時に笑ひて、濫りに笑はざるのみ。蓋しその才幹、男子に優る者有り。故に能く豪客を擲掄し、而して反つてその脊を受く。嘗に千金の価ならざるなり。橋南の妓団、皆な相語りて曰く、「園姐、日ならずして將に巨大倉庫を築きて、商業を開かんとす。羨むべきかな」と。蓋し一笑の博する所なり。唾唾の聲、豈に苟もすべけんや。

香山涼枕夢難醒

香山の涼枕 夢 醒め難し

墨水春觴手不停

墨水の春觴 手 停めず

知擲千金沽一笑

知んぬ 千金を擲げうちて一笑を沽しを

嬌眸偏為阿郎青

嬌眸 偏に阿郎の為に青し

評に云ふ。毎篇、自ら一段、人を動かす処有り。是れ漁史、最も得意の筆。一篇、一篇の格法有り。愈々出て、愈々変ず。筆力自在。

○千金買笑Ⅱ「鮑照・代白紵曲「千金雇笑買芳年」」。○端肅Ⅱ正しく厳か。

○豪客Ⅱ豪遊する客。お大尽。○脊Ⅱ目をかける。愛着を感じる。○橋南Ⅱ新橋の南で鳥森の花街をさす。○博Ⅱ得る。○唾唾Ⅱ笑い声。○苟Ⅱおろそか。いい加減。○香山Ⅱ洛陽に近い白居易が隠棲していた山。白居易は香山居士と名乗っていた。ここでは「いかほ」とルビがふつてあり、伊香保温泉を意味する。○墨水Ⅱ隅田川。

沿岸のあちこちにある花街を示す。○春觴Ⅱ觴はさかずき。春景色

の中で酒をのんでいること。○沽_レ買_ハう。売_ル。○一笑_ハ「白居易・長恨歌「回眸一笑百媚生」」。○阿郎_ハ女が想_フ男を親_シんで呼_ンだりする語。○青_ハ青眼。親_シしい人に対_スるまなざし。

現代語訳

小園(新橋)
昔の人はこう言った。「一枚をはたいても、笑顔は買うものだ。だからやめられない」。つまり美人の笑顔というものは、古人の言うとおりで、それくらい価値のあるものなのである。小園は笑顔を見せようとしない。挙措動作からしてキチンとしてスキがなく、花柳界ではちょっと見当らない芸者だ。だからといって、小園は無理に笑いをこらえているわけではなく、可笑しければ無論笑う。やたら減多に笑わないということだ。言ってみれば、頭の回転に男勝りのところがあつて、金持の上客でも遠慮なくからかったりする。そういうところがかえって喜ばれ、客受けが良い。つまり客に千金を使わせるだけのものがあるということだ。烏森の姐さんたちは口をそろえて言っているそう。小園さんはその内きつと大きな蔵を建てて、商売をはじめめるヨ。羨ましいね」と。やはり千金の笑顔がもたらすのだらう。花柳の世界では、笑顔一つでもおろそかにしてはいけないということか。

伊香保には涼風が吹き渡り、ついうとうとしてなかなか眼がさめぬ

大川の春景色を眺めながら飲んでみると、つい酒がすすむ

昔は大金をはたいて美女の笑顔を楽しんだこともあつた
女の色つばいまなざしは、ただもう想_フ男のために向けられていた

評に云う。回を追うごとに人の心を動かすような文章だ。柳北君が最も得意とするところの筆運びであり、一篇ごとに適した文体を用い、次々に表出するかと思えば、そのたびに変化している。その筆力は思いのままだ。

頭評

①褒姒之笑能傾周室妃子之笑殆覆唐家笑之可畏如此小園不濫笑者豈有所戒歟
褒姒ほうじの笑、能く周室を傾け、妃子の笑は殆ど唐家を覆す。笑の畏るべきこと此の如し。小園の濫りに笑はざるは、豈に戒むる所有るか。

○褒姒_ハ周の幽王の寵妃。この妃は笑つたことがなかつたので、王は何事もないののろしを上げて諸侯を集めてみせると、はじめて笑つた。後、外敵が侵入したとき、王はのろしを上げたが諸侯は集まらず、王は殺された。○周室_ハ周の国。○妃子_ハ楊貴妃。○唐家_ハ唐の国。

現代語訳

①褒妃の笑いによって周の国は傾き、楊貴妃の笑いが唐の国を滅ぼしたようなものだ。笑いというものは、恐るべきものである。小園

が濫りに笑わないのは、もしや心に戒めるところが有つてのことかもしれない。

房八（柳橋）

文士墨客の書画会を開くや、必ずそのことを幹する者、男子に扇面亭主有り。而して女子に房八あり。房八、妙齡より文墨の宴に待す。故に江湖の雅流、一もこれを識らざる者無し。若しその豪客冶郎、花を探り、柳を折るの遊は、則ち房八は与らず、常に管城子、即墨侯と伍を為すのみ。儕輩皆な書画会委員と呼び做す。その宴に待する、脂粉を傳けず。蓬鬢野服、見る者、往往、その歌妓たるを知らざるなり。酒酣にして、爛跣し、醉客、喧呼す。或は双拳相搏ち、盤碟進り砕く。房八、恬然として、動かず。左に論し、右に慰し、巧みに風波を斂めて、聴かざる者有れば、則ち健腕これを掖し、直ちに樓を下り去る。殆ど巴姫、敵を擒にするの勇有るなり。余、雅流の会に赴く毎に、敢て文士の筆鋒を畏れずして、特に房八の腕力を畏る。

展箋捧硯可憐生 箋を展し 硯を捧ぐ 可憐生

徒解詞章不解情 徒た詞章を解して 情を解せず

烏兔匆匆翠蛾老 烏兔 匆匆 翠蛾老い

廿年贏得雅流名 二十年 贏ち得たり 雅流の名

評に云ふ。西京の妓流、或は画を善くし、或は琴に妙に、文人雅客と稱や因縁有り。此の間、絶へてその人無し。或はこれ有るも、藉りて以て艶を售り、冶を齧ぐを免れず。若し房八をして略ぼ文字を

解せしめば、必ず一段の佳話を添へん。是れ惜しむべきなり。

○書画会 文人が、茶屋などに同好者を集めて、書画を書き、あとで酒宴などを催すもの。○扇面亭主 『式亭雜記』に「辛未三月十二日、両国ばし向尾上町中村屋平吉方にて書画会、会主三馬……」の記事中に、「当日世話役扇面亭（馬喰町肴店に住す扇屋伝四郎）」とあり、書画会開催におけるプロデューサーとして欠かせぬ人物であった。○探花 花の名所をたずねる。○折柳 送別。漢代、長安の都を旅立つ人を見送るとき、柳の枝を折ってはなむけとした故事。○管城子 筆のこと。韓愈が筆を擬人化して毛穎と名付け、「毛穎伝」をつくり、その中で、毛穎が秦の始皇帝によつて管城に封じられ、管城子と号したと記述したことによる。○即墨侯 硯のこと。唐の文嵩が硯を人になぞらえて「即墨侯石虚中伝」を作ったことによる。○儕輩 仲間。○蓬鬢野服 蓬のように乱れた鬢と質素な衣服。○跋 いたおれる。よろめく。○盤碟 大皿と小皿。○巴姫 巴御前。○可憐生 姿やさしく美しい人。○烏兔 月と日の異称。歳月。○匆匆 匆匆。あわただしい。おちつかないさま。○翠蛾 美女の眉。美人のこと。蛾は蛾眉。○廿年 贏得雅流名 杜牧・遺懷「十年一覺楊州夢 贏得青樓薄倖名」。○西京 京都。○此間 此の土地の意。柳橋をさす。○藉 借りる。貸す。○冶 なまめかしい。

房八（柳橋）

現代語訳

文人墨客が書画会を催すときに、決まって会を取り仕切る者は、男なら扇面亭主人というのが有り、女なら房八がいる。房八は若い頃から文人たちの宴席に侍っていた。したがって東都の文人たちで、房八を知らないものはなかった。かりにお大尽や遊治郎が花見の宴を催したり、送別の宴をはつても、房八はそうした座敷には出ない。

いつも文人墨客のお相手をしているのだ。だから他の芸者たちは、だれもが房八のことを書画会委員と呼んでいるようだ。房八は宴席に出ても、化粧気がなく、髪は乱れて普段着のまま、はたから見ていると、とてもじゃないが芸者には見えない。酒宴も酣になり、燭台の灯りもゆらゆらしだすと、酔った客同士の喧嘩がはじまる。殴り合い、皿が飛びかき、破片が散らばる。狼藉のなか、房八は平然として動こうともしない。「駄目じゃないの」とか「堪忍してあげて」とか巧みに諍いを収める。それでも言うことを聴かない客がいれば、そいつを抱きかかえるや階段を下りて行ってしまう。まるで巴御前が敵兵を捕虜にするがごとき蛮勇である。私はこうした雅宴に出掛けるたびに、文人仲間の批評はさておき、房八の腕力に閉口するのだ。

詩箋をひろげ硯をさし出すのは可憐な美女

ただ文字の字面は解っているが、そこにある思いには無頓着

時はあわただしく過ぎ去り、女は老いを迎える

二十年がもたらしたものは風雅の道に名をあげたこと

評に云う。昔の京都の妓女の中には、画技に長じているものもあれば、琴を弾じる名手もいて、文人墨客との付き合いにも馴れていたものだ

が、この柳橋ではあまり見かけない。かりにいても、座敷に出れば、もっぱら色気をもつて客に媚を売るので。かりに房八がもう少し文章の中味を理解できれば、一段上の佳話になったものを、残念なことではある。

頭評

① 怪石 幽蘭 相配成趣

怪石、幽蘭、相配して趣を成す。

② 亦奇

亦た奇なり。

③ 以文不聽以武繼之大有豪傑氣象

文を以て聴かざれば、武をもつてこれを繼ぐ。大いに豪傑の氣象有り。

④ 是亦奇

是れも亦奇。

○ 怪石 玉に似た美しい石。○ 幽蘭 奥ゆかしく気高い蘭。

文人趣味に欠かせない石と東洋蘭への愛着。○ 聴 聴ゆるす。おさめる。

○ 繼 受け継ぐ。

現代語訳

① (書画会の上つらいとして) 怪石や東洋蘭が飾られて趣を成している。

② また珍奇である。

③言葉でいうことを聴かないならば、力で解決する。まさに豪傑の気象である。

④是もまた珍奇である。

小兼（新橋）第八十一号

余、初め小兼の家、何れに在るを識らざるなり。客歳、花月楼の宴、友人某氏、酔後、誤つて兼の臉を傷つく。醒めて大いに悔い、諸れを撫松子と余とに謀る。故を以て一たび其の家に抵る。兼、住して金春坊浴室の前に在り。屋宇清楚、器具雅潔。而して爺嬢皆な淳樸、市井の人に似ざるなり。兼、天質豊腴、恐らくは趙家の種に非ずして、楊氏の裔為るか。其の性、太だ温厚、人、目して妓中の君子と為す。頃日、友人、酒を飲むと雖も、皆な謹むのみ。復た花月楼の事の如き者無し。故に余、兼を見ざること、久し。

華清池畔住名妹 華清池畔 名妹を住ましむ

好就温湯濯玉膚 好し 温湯に就きて 玉膚を濯ぶ

秋草満園花尽瘦 秋草 満園 花 尽く瘦す

憐他函菖獨芳腴 憐れむ 他かの函菖かたん 独り芳腴

評に云ふ。文は濃を以て佳と為す者有り、淡を以て妙と為す者有り。章法、自ら別。若し混じて一と為さば、則ちふたか而らこれを失ふ。此の篇、蓋し淡の妙を得る者。

○花月楼 明治元年創業の料亭。京橋竹川町にあった。○臉 下ま

ぶた。顔面。○撫松 服部撫松。柳北と同時代の文人でジャーナリスト。「花月新誌」のライバル誌「東京新誌」を発行す。花柳界の消息記事は売り物の一つ。○金春街 現在の中央区銀座八丁目あたりで、新橋芸者の本拠地。○爺嬢 父母の俗称。○豊腴 豊にこえる。○趙家 趙飛燕。前漢の成帝の皇后。美人で舞にすぐれ、その軽やかな身のこなしは、燕に似ていたという。○楊家 楊貴妃。「白居易・長恨歌」「温泉水滑洗凝脂」。楊貴妃はふくよかな美女であった。○君子 蓮の花の異称。蓮は濁った水中に咲くので、泥水稼業の妓中に咲く蓮としてゐる。○華清池 華清宮の池。そこに温泉が湧き出て、楊貴妃が玄宗から浴を賜ったことで知られる。○妹 美しい。○憐 愛でる。○他 別の。かの。○函菖 蓮の花。美人のたとえ。○芳腴 豊腴に同じ。

小兼（新橋）

私は以前、小兼の家がどこにあるのかわらなかつた。去年のこと、花月楼の宴席で、友人の某氏が酔つてうっかり兼の臉を傷つけてしまった。某氏は酔いが醒めると大いに後悔して、撫松さんと私に相談をもちかけてきた。そういうわけで、初めて兼の家を訪ねることになった。その家は金春街の湯屋の前にあつた。こじんまりとしたたずまいで、家の中もよく片付いてゐた。両親はそろつて醇朴そのもの、街中の人には見えないほどであつた。兼は生まれつきの太りじしである。敢て言えば、軽やかな身のこなしの趙飛燕の系統と

いうよりは、ぼつちやりとした楊貴妃のすがたを髣髴とさせる。性格はきわめて温厚、泥水稼業に咲く蓮の花のように言われている。最近では友人たちも酒席では羽目はずさない。したがって花月楼のような椿事もなくなつた。というわけで、兼に出会うこともなくなつて随分になる。

華清池のほとりに美人が住んでいるという

おりしもその美人は温泉に湯浴みして玉のような膚を洗ひながしている

まわりの庭園には秋草がはびこり、花々は凋れている

その中で蓮の花のように美人のすがたはふつくと豊に匂い立つ

評に云う。文章の良し悪しは、濃密な文体をよしとするものもあれば、淡白な文体のほうが似合っていることもある。どちらを選ぶかは、そのときによる。一度に両方を採り入れようとすると、それぞれの良さが失われ、文章にはならない。この篇は、淡白な文体が成功した例である。

頭評

① 戊辰前後飲酒徴妓往往有酔而劍舞者時以為豪快不知爲殺風景今而思之流汗浹背可見時勢之變矣花月之遊豈亦時出梁山泊故態歟

戊辰前後、飲酒して妓を徴すれば、往往、酔ひて劍舞する者有り。時に以て豪快と爲し、殺風景た爲ることを知らず。今にしてこれを思

へば、流汗、背を浹す。以て時勢の変を見るべし。花月の遊、豈に亦た時に梁山泊の故態ふるまひを出さんか。

② 淡淡叙去大有逸致

淡淡として叙し去りて、大に逸致有り。

○ 戊辰前後 Ⅱ 戊辰戦争 Ⅱ 慶応四年 (一八六六) Ⅲ 明治二年 (一八六九) の前後。○ 徴妓 Ⅱ 芸者を座敷に呼ぶ。○ 劍舞 Ⅱ 真剣を手にして踊ること。多くは詩吟とともに。○ 浹 Ⅱ しょう。うるおす。あまねし。

○ 梁山泊 Ⅱ 『水滸伝』で、主人公の宋江が一味と立てこもつた要塞。転じて豪傑や豪傑気取りの野心家などの集合するところ。○ 故態 Ⅱ 昔のままのすがた。○ 去 Ⅱ 助辞。動詞の後に於いて、その動作が続いてゆく感じを表わす。○ 逸致 Ⅱ 優れた趣。

現代語訳

① 戊辰戦争のころ、宴席では往往にして酔いにまかせて劍舞をする者がいたものだ。その時にはそれを豪快だとして、殺風景であることとを分つていなかった。今にして思えば、冷や汗が背中に伝わるくらいだ。そのことから時代の変化ということがわかる。風流を楽しむ宴席で、梁山泊でもあるまいし、奮行は御免こうむる。

② 淡淡とした叙述にはひとときわ雅趣がある。

阿久 (柳橋)

阿久は客に接するに敏に、而して色芸も亦た佳なり。故に貴紳豪客

の宴、必ず聘招に遭ふ。曲中の月旦も亦た貶議無し^①。余、その一家為るを知る。久、初め小久と称し、錦八と同じく美濃善の為に贖はれ、小星と為る。善の家を喪ふや、錦八これに負かず。而して久これに負く。故に識者、鄙しむ。嗚呼、花柳場中、誼に背き、恩を忘るるは、慣れて以て常と為す。素より怪しむに足らざるなり。

臉紅黛翠照人來 臉紅^{けんこう}黛翠^{たいすい} 人を照らし来る

一曲新聲且侑盃 一曲の新声^{しんせい} 且つ盃を侑む

眞個萍花無籍在 眞個に萍花^{へいけ} 籍在無し

隨風隨水自由開 風に随ひ 水に随ひて 自由に開く

評に云ふ。数寄坊の妓、亦た小久と名づくる者有り。色芸を以て聞ゆ。その良に従ふこと久し。知らず、結尾、甚麼の模様を做すを。畢竟、流蕩放逸、那の輩の行逕、冷を捨て、熱に附くは決して怪しみ得ず。若し夫れ稍や理義を知らば、諺に所謂、江戸兒子の性質を壞了する者のみ。然りと雖も、今日、士君子のその質を全うする者、何ぞ衆きや。

○色芸 容貌と技芸。○聘招 招聘。○曲中 曲輪の中。ここでは柳橋の花街。○月旦 人物評。○貶議 人をおとしめる話。○大家 其道の達人。○錦八 柳橋の芸者。第六十九号に既出。○美濃善 深川の豪商。第六十九号に既出。○小星 妾。○鄙 いやしむ。○花柳場中 花柳界。○誼 義理。○臉紅 黛翠 ともに美人をあらわす。○照 つき合わせる。見比べる。○新声 新曲。○眞個

真箇。まことに。○萍花 萍はうきくさ。浮草稼業の芸者。○籍在 在籍。○従良 娼妓が身請けされて結婚すること。○数寄坊 数寄屋橋の一带。坊は町の一画。○甚麼 どのな。なに。○行逕 行動。○熱 焼く。もやす。

現代語訳

お久(柳橋)

お久は客あしらいにそつがなく、容貌よしで芸もまた上手いものだ。だから上客の宴席には必ず招かれる。柳橋のなかでも、悪いう人はいない。私は、お久が芸者衆のなかでも飛び抜けているように思う。久は以前、小久と呼ばれていた。錦八と同様、美濃善に身請けされ、妾となった。美濃善が破産したとき、錦八は美濃善を棄てなかつた。にもかかわらず、小久は美濃善を捨てた。だからまわりの連中は、よく言わなかつた。まことに、花柳界では義理を欠き、恩義を忘れることがあたりまえとなっているが、これはこれで仕様が無いことだ。

それぞれの出で立ちで姐さんたちが客をあしらっている

だれかが新曲を唄えば、こちらではお一ついかがと酒をすすめる

浮草の花々には決まつた居所はない

風の吹くまま、水の流れにさかわらぬままに花を開くのだ

評に云う。数寄屋橋の花街にも小久と名の芸者がいて、容貌もよく、芸も達者で知られていた。それが嫁に行つてから日数もすぎたが、

その後どうなっているのかは分らない。所詮、浮草稼業の身だから、おおよその見当はつく。冷たくされれば別れ、熱に浮かされればくつく。この世界ではどうということはない。かりに少しでも理屈というなら、ことわざに言うところの江戸っ子の風上にもおけないとでも言うしかない。とはいえ、昨今の紳士諸君が江戸っ子の氣質を心得ているかは、何とも言えない。

頭評

①敏於利所以不敏於義也

利に敏きは、義に敏ならざる所以なり。

②如此救得不失分寸

此の如く救ひ得て、分寸を失はず。

現代語訳

①損得勘定ばかりしていると、義理を欠く結果になる。

②このように救済の言葉を付することで、この一文がきちんとまとまっている。

元七（新橋）第八十二号

「嬌小 居然 掌上に撃ぐ、花身 婀娜 元と天生、蛾眉は老いず鬢眉は老ゆ、猶ほ記す 当年小七の名」。是れ友人田蓮舟、元七を咏ずる詩なり。元七、原と小七と名づく。細腰、善く舞ふ。余の初め新橋に遊ぶや、最も先づこれを聘す。相識ること三年。一日、俄に

余に告げて曰く、「妾、將に簪を脱せんとす」と。余、為に質し、且つ問ふて曰く、「卿、箕帚を何人に奉ず」と。小七曰く、「否。妾將に苦界を脱し、女紅を事とし、他日、良家に嫁し、一たび花柳の汚を雪がんとす」と。余、大いにこれを奇とす。小七、既に去り、復た樽前、余が為に舞ふ者無し。客臘、小七復た簪を掲ぐと聞く。余、心に疑ふ。これを烏森の酒樓に招く。忽ち一雛妓の蓮歩して来るを見る。怪しんでこれを問へば、乃ちその義妹なり。余、微笑してその名を問ふ。曰く、「小七」と。且つ告げて曰く、「阿姉、目今元七と称す」と。乃ち更に命じてこれを招く。元七来り、謝して曰く、「妾、嘗て先生と言ふ。火坑を跳出して、將に彼岸に達せんとす。而して不幸にして、父親病に罹り、家道頗る艱しむ。冤業、未だ除かず。復た歌舞を以て、先生に見ゆ」と。言、訖つて泣く。余、為に慘然たり。元七、久しく家に在りて、薪水の苦を嘗む。然れども、容姿、依然として旧の如し。蓮舟、謂ふ所の「蛾眉老いざる」者は真に然るなり。独り奈せん。余の鬢眉、復た前日に非ざるを。

舞袖猶留前度春 舞袖 猶ほ留む 前度の春

酒間話舊翠眉顰 酒間 旧を話すれば 翠眉顰む

無端想得西江月 端無くも 想ひ得たり 西江の月

重照吳王宮裏人 重ねて照す 吳王 宮裏の人

評に云ふ。今を距る十余年前、新橋に小米なる者有り。年、四十を過ぐ。猶ほ伎を售り、善く談じ善く飲む。自ら古米或は老米と称す。知らず、今、焉くに在るや。此に謂ふ所の元七の元は猶ほ旧或は故と云ふが

ごとし。蓋し亦た変文、奇を衒ふ者か。

○嬌小ハ小柄で可愛い女。○居然ハそのままに。○撃ハささげる。あげる。○花身ハ美しい女性のすがた。○婀娜ハたおやか。しなやかで美しいさま。○鬚眉ハひげとまゆ。男子のこと。昔、男子の美しさは、鬚と眉にあると考えられた。○田蓮舟ハ田辺太一「天保二年（一八三一）〜大正四年（一九一五）」幕臣。外交官。岩倉使節団に随行。蓮舟は号。○箕帚ハ掃除などをする下女。転じて人の妻妾になることの謙遜のことば。○女紅ハ女功。機織り、裁縫などの女の仕事。○客臘ハ去年の十二月。○蓮歩ハ女性のしなやかに歩くさま。○火坑ハ苦しい境地のたとえ。○艱ハくるしむ。なやむ。けわしい。○冤ハぬれぎぬ。うらみ。○前度ハ前回。以前。○西江ハ江蘇省蘇州市の西南にあった姑蘇台の西を流れる川。「李白・蘇臺覽古詩「只今惟有西江月 曾照吳王宮裏人」」春秋時代、呉の都城があった地に佇んだ李白の詩。宮裏の人は宮廷の美人で、呉王夫差を籠絡した西施をさす。

現代語訳

元七（新橋）

「むかしのままの小柄な美人を手のひらにのせてみたい。その美貌は生まれついでのもの。美人は若さをたまち客は老いさらばえる。今でも覚えているか。つて小七という名の女がいたことを」。これは友人の田辺蓮舟さんが元七を詠った詩である。元七をはじめ小七と

いう名であった。しなやかな姿で舞の名手であった。私は新橋で遊び初めたころ何はともあれ先ず、小七を座敷に呼んだものだ。それから三年、ある日、小七はいきなり告白した。「あたし、芸者をやるの」と。私はそれを聞いておめでとうを言い、さらに尋ねた。「お前さん、誰の厄介になるんだね」。小七は「そうじゃないの。あたしは水商売をやめて、手仕事を身に付け、いつか好い人のところにお嫁に行き、泥水稼業からさっぱり抜け出したいのさ」。私はこれ聞いて感心したものだ。小七はどこかに行つてしまい、酒席でその舞をみることも無くなった。ところが去年の暮れのこと、小七が戻つてきたということを耳にしたのだが、半信半疑で、烏森の料理屋に呼んでみた。すると一人若い芸者が裾を引きずつて来たので、ために名前を聞いたら、あの小七の義妹であった。私は笑みを浮べてあらためて小七なのかと聞いた。すると「小七です」と答え、さらにつけ加えた。「姉さんは元七で出ています」と言うので、元七も座敷に呼んだ。元七は来るなり、無沙汰を詫び、「あたしは昔、先生とお話しをしていました。苦界から飛び出して、安心できるころへ行こうと思つていましたのに、運悪く父親が重い病気にかかり、暮らし向きも苦しくなつて、相変わらずの浮草稼業です。お座敷で先生に再会するとはねえ」。言い終えて元七はよよと泣いた。私も話に引き込まれて暗澹とした気分になった。元七は廃業して実家に戻り、家事に苦勞したようだが、見た目の容姿は、昔のままである。蓮舟さんが仰有る、「美貌は衰えていない」とはまったくその通りだ。そ

れにしても私はどうすればよいのだ。日々老いさらばえて行くのに手の打ちようがない。

舞をするすがたはあの頃のまま

盃をかわしつつ昔話になると、美人は眉をひそめる

ゆくりなくも李白の西江の月の詩句が浮かんできた

むかし呉王の宮殿の美女を照らしていた月が今も暗々と輝いている

評に云う。今から十年以上になるか、新橋に小米という芸者がいた。年はとうに四十を過ぎていたようだが、芸でお座敷をつとめ、よく喋り、よく飲んでは、「あたし、小米じゃなくて、古米、そうでなければ老米というところね」などと嘯いていたものだ。今頃どうしているのやら、とんとんと分らぬ。元七の元にも、旧か故という意味があるようなものだ。(小七から元七に変えたことは) 文字を変えて奇を衒ったということだろうか？

頭評

①借蓮舟詩説起妙不費力

蓮舟の詩を借りて説き起す。妙にして力を費やさず。

②此段不叙元七先叙新小七何等巧致使人不可測意匠所在

此の段は元七を叙せずして、先ず新小七を叙す。何等の巧致。人をして意匠の在る所を測るべからざしむ。

③冷然駐筆思遂韵遠

冷然として筆を駐む。思、遂にして、韵、遠し。

○意匠工夫。○冷然〓輕妙なさま。○遂〓奥深い。○遠〓深遠。現代語訳

①蓮舟の詩を借用して筆を起す方法は、絶妙で軽快だ。

②この段落は、元七のことを語らないで、今の小七から始めたところが、なかなかの技巧であって、文章の仕掛けを見せないようにしているところがある。

③冷やかに文章を終えている。思いは奥深く、風韻がある。

才吉(柳橋)

客に先だつて酔ひ、意暢^{のび}び、氣旺^{まか}に、口、啫^{ニギニヤ}啫^{ニヤ}を唱へて、已まざる者はそれを才吉と為す。才吉、老いて善く飲み、自ら女中の酒仙と号す。常に航船^{かうせん}を呼び、毫も他を問はず。故に大戸の客多く、これを愛す。目して啫^{ニギニヤ}啫^{ニヤ}と為す。雛妓・小鬟も亦た忌憚^{こは}せず。これを愛すること、慈母のごとし^①。俗子の宴、時に酬客^{しゆく}有り。罵声、雷のごとく、拳^{こぶし}進^まり、杯飛ぶ。衆妓、皆な逃避、暇あらず。才吉、独り恬然として動かず。右手に壺^{ひつす}を撃^つけ、左手に觴^{さか}を捧^たげ、一笑、客に属^まして曰く、「人間万事、啫^{ニギニヤ}啫^{ニヤ}のみ。公、何ぞ噴^いるを為^なさん」と。客、竟にこれが為に顔を解くと云ふ。余、毎に曰く、「才吉、外貌、愚のごとし。而して其の中、自ら奪ふべからざる者有り。才吉、愚ならず」^{②③}。

何須嬌怨寄金絃 何ぞ須ひん 嬌怨 金絃に寄するを

一斗沽春興欲仙 一斗 春を沽かひて 興 仙せんと欲す

醉膽如渠君莫笑 醉膽すいたん 渠かれが如き 君 笑ふ勿れ

裙釵復見李青蓮 裙釵くんざ 復た見る 李青蓮

評に云ふ。東京の名妓、此の技倆、無かるべからず。嘗て不破名古屋の戯を観るに、両雄、刃を揮ひ、奮闘激戦、結んで解くべからず。妓葛城、織音嬌舌、一言これを過め、満場をして喝采止まざらしむ。以て其の気概を見るべし。顧ふに今の妓、柔媚巧佞、唯だ阿堵物、是れ視る。何ぞ東京の氣象無きや。

○暢IIのびのびする。○啾啾IIはいはい。○航船II大盃。航は角形のさかずき。○大戸II富貴な家柄。大酒飲み。○忌憚II忌みはばかる。遠慮。○俗子II俗士。俗人。○醜客II醜は酒に酔って狂う。酒乱。○属IIたのむ。ゆだねる。○嬌怨IIなまめかしい様子で怨むこと。○金絃II金は美称で絃歌の宴を意味する。○沽II買う。売るの意もあり。○春II酒。唐代、酒の名に「春」の字が多く用いられた。○醉膽IIよっぱらい。○裙釵IIすそとかんざし。女性。○李青蓮II李白の号。○不破名古屋II歌舞伎の外題名。文政六年（一八二三）江戸市村座で初演。権八・小紫に幡随院長兵衛をからめる。但し原作は、山東京伝作の読本『昔語稲妻表紙』で、不破伴左衛門と名古屋山三郎の抗争を描く。葛城は山三郎の恋人（実は不破の妹）。○戯II芝居。○巧佞II口先が達者でへつらう。○阿堵物IIぜに。阿堵は六朝・唐の俗語で、この、その、これ、それ。東晋の王衍が錢を「そのもの」

といった故事による。

現代語訳

才吉（柳橋）

お客より先に酔っぱらい、意気盛んで、口はなめらかに、いつもこの調子でお座敷をつとめているのが、才吉である。才吉は老いてますます酒が強くなり、自分から女酒仙とうそぶいている。いつも酒を求めて、他は何もいらぬという。だから大酒飲みの客から引つ張りだこで、人氣があり、にやごにやご婆と呼ばれている。若手の芸者や半玉からも受けがよくて、まるでおつかさんのように、慕われている。俗客の宴席では、時には酒乱の客がいて、大声でわめきちらし、殴り合い、盃をぶん投げる。まわりの芸者たちは逃げるのに大わらわだ。才吉だけは平然としてどつかと坐り、右手にお銚子、左手に盃を持って、笑って酒を勧めながら言う。「いろいろあるでしょうが、何でもにやごにやごでいいじゃありませんか、お前さん、何で頭にきているのサ」。すると客はいつの間にか目尻が下がってくるのだそうだ。私はいつも言うのだ。「才吉は見かけは愚鈍のようだが、中身は人に抜きんでた善いところがあって、決して愚鈍などではない」と。

宴席では何も媚態を見ればよいというものではない

斗酒なお辞せず、酔って天にものぼる気分になればよいのだ

才吉のような酔っぱらいを笑ってはいけぬ

芸者の姐さんにも李白のような酒飲みがいるのだ

評に云う。東京の名妓といわれる芸者には、上手に座敷を取り持てるのがいくらでもいた。昔、芝居の「不破名古屋」を観たことがあるが、不破と名古屋の二人が刀を振り回し、大立ち回りをして決着がつかないところへ、芸者の葛城がやってきて、何やら小声でたおやかにささやくと、二人はあっさりと争いをやめたので、芝居の客は大喝采であった。だから、葛城のような氣迫が大事なのだ。それにひきかえ、近頃の芸者ときたら、やたらにすりよって、口先だけのおべんちゃら、氣になるのは金だけ。江戸っ子氣質はどこへ行つたのやら。

頭評

① 彼蓋自知年邁不為客所愛故為此戲諛察機善用所以為才吉豈是尋常醉女子哉

彼、蓋し自ら年の邁^まきて、客の愛する所と為^ならざるを知る。故に此の戲諛を為す。機を察し、用を善くするは、才吉^{たかきち}為る所以なり。豈に是れ尋常の醉女子ならんや。

② 此等處即是本色

此等の處は即ち是れ本色。

③ 首段照應用筆不板

首段との照応、筆を用いて板ならず。

○ 邁^ますぎる。○ 本色^{ほんしき}^二本来の性質。○ 板^い平板。

現代語訳

① 才吉は年がいつていて客に愛されないのを自分でも知っている。その故にわざとこうした巫山戯た言動をする。状況を理解し、よい結果をもたらすのは、才吉の才吉たる所以である。まったくこうしたことは、普通の芸者に出来ることではない

② 才吉のこうした行動は、生まれついでのものであるろう

③ 書き出しとの照応は、書きぶり平板ではない。

新吉(新橋)第八十三号

若しその品位を擬せば、則ち新吉は、中等の上に居るを得ず。然れどもこの子、活々潑々、颯来颯去^{さつらいさつこ}し、眼歌舌舞、狂の如く、醒の如く、人をして応接、暇あらざらしむ。是を以て亦た善く售^うる。新吉、年未だ笄に及ばず、而して能く老妓輩と翺翔^{こうしょう}す。その臆^{おそ}の大なる、その氣の鋭なるも亦た同年校書の企て及ぶ所に非ざるなり。聞く、嘗て一寡婦の為に騙^{だま}せられ、その術中に陥り、債を負ふ、若干。新吉自ら法廷に出て、冤を弁ず。嬌舌、敵を挫^くき、応酬^{おうじゅう}流るるが如し。衆皆な愕然たり。亦た奇女子なるかな。

巧舌簧如獻媚來 巧舌 簧如 媚を獻じ來る

柔荑弄客亦多才 柔荑 客を弄する 亦た多才

大牢雖美乏新味 大牢 美なりと雖も 新味乏し

却是尊羹堪侑杯 却つて是れ 尊羹 盃を侑むるに堪へたり

評に云ふ。その臆、大なり。故に能く法吏に対すること、狎客に接

するが如く、財主を視ること、箱奴を待つが如し。その氣、鋭たり。故に能く老妓をしてその後に瞠とど乎とたらしめ、酔漢をしてその前に嗜とち焉とたらしむ。亦た一の妙手段なり。

○品位ニ人柄。○擬ニはかる。おしはかる。○颯ニつむじ風。疾風。
○醒ニ二日酔い。悪酔い。○笄ニ束ねた髪をまとめるもの。女子は十五歳で髪を結い、笄をさした。女子が成年になること。○翱翔ニ翺はかける。とびまわる。鳥が高く飛び回る。得意に振る舞う。○膽ニ肝ニつ玉。○校書ニ芸者のこと。○騙ニだます。○冤ニ無実。○簧如ニ笛のように。簧は笛の舌。ふえ。○柔荑ニ女性の手の白く美しいことのとえ。かやの初めて白い芽を出したもの。莢はつばな。
○大牢ニ太牢。牛・羊・豚のそろった料理。りつばなごちそう。本来は天子・諸侯が社稷の祭に供える。ここは上妓の比喩。○蓴羹ニ蓴菜の吸物。蓴羹ニ鱸膾ニ。鱸膾はすずきのなます。ここは新吉の比喩。○侑ニすすめる。○狎客ニなじみの客。○視ニ待遇する。○瞠乎ニ目をみはるさま。驚き呆れて見つめるさま。○嗜焉ニうつとりするさま。

現代語訳

新橋の芸者のなかで、等級をつければ、新吉は中の上までにはいかないであろう。けれども新吉は、いきいきとして動作が俊敏、目の動き舌まわりは、常軌を逸し、酔っぱらいのようで、相手をしようにも、手のだしようがないくらいだが、こういうところが客に受

けているのだ。新吉がまだ一人前でないころでも、年増の姐さんたちとも平気でわたりあつていた。肝つ玉のすわったところ、気性のとがったところなど、同い年の朋輩の遠く及ぶところではなかった。聞いたところによると、いつのころか、どこかの後家に騙されて、幾ばくかの借金を負う羽目になった。新吉はすすんで法廷に出て、無実を訴えた。愛らしい弁舌で相手を説き伏せ、そのやりとりは流れるが如く、傍聴人は皆なあつけにとられたという。何とまた、珍しい女である。

笛の音のような巧みな口舌で客の氣を引いてきた

白魚のような手で客をあつかうのもお手のもの

立派な肉料理のような上妓はすばらしいが新味に乏しいが

あつさりとした蓴菜の吸物のような新吉のほうが、かえって酒がすすむものだ

評に云う。新吉の肝つ玉は大きい。だから司法省の役人が相手でもものおじしない。まるでなじみの客に應對するようだ。金主に対する視線も、箱屋を見るのと同じだ。新吉は氣性が勝っている。だから年増の姐さんたちは、後ろの方であきれかえっており、酔った客は新吉の前であんぐりとしているのだ。これもまた、絶妙の手管か。

頭評

①是亦一見解與依様畫胡蘆者不同

是も亦た一見解。様に依りて胡蘆を画く者と同じからず

②事嘗見繪入新聞又戴與俳優相囁事此不載以為一佳話何也

事は、嘗て絵入り新聞に見ゆ。又た俳優と相囁む事を載す。此に載せずして以て一佳話と為すは何ぞや。

○依様画胡芦まねばかりして新しい工夫のないこと。胡芦は夕顔の異名。○囁ささやジツ。呢に同じ。なじむ。

現代語訳

①これもまた一つの見方である。ありきたりの文章とは、同列ではない

②この事はかつて絵入り新聞で見たことがある。またそれには役者との噂話を載せていたが、その醜聞をここに載せずに、一つの佳話としていっているのはどういふことだろうか。

小六(柳橋)

往昔、北越に角平かくへいなる者有り。常に小獅頭こじうぢうを被りて舞ふ。呼んで角平獅子といふ。その戯、今、都下に存す。肢体軽捷、態度宛転。兒童これを喜ぶ。柳橋に雛妓有り。名づけて角平といふ。亦た嬌小にして敏捷なるを以てなり。角平、未だ二八に及ばず。而して大妓の班に列し、改めて小六と称す。他妓、毎に客の貴賤雅俗を以て、稍やその遇待を異にす。意、詭遇はかを規るなり。而して六は敢てこれを扱ばず、恬として酒を行る。故に客、却つてこれを喜ぶ。然れどもその举止、往往にして儕輩の為に愛せられず。毀多く、誉少なし。

亦た憫あはれむべきなり。頃日、余、六を某楼に見る。其の容姿、侷雅かんが、復た前日の小獅頭に非ず。後進の成立、寔まじに測るべからざる者有り。

士林得失苦難評 士林の得失 評し難きに苦しむ

何況綺羅叢裏名 何ぞ況んや 綺羅 叢裏の名

人道多情殊可厭 人は道みちふ 多情 殊に厭ふべしと

奚知可愛是多情 奚なんぞ知らん 愛すべきは 是れ多情なるを

評に云ふ。角平の戯、最も倒立に妙なり。手を以て脚と為し、脚を以て頭と為す。今を距る八九年前、新柳二橋、小妓、此の戯を演ずる者多し。衣裙、乱れず、微塵も動くこと無し。殊に絶妙と為す。今絶へて、これ有るを見ず。而して半夜三更、倒鳳顛鸞うちほうてんらん。則ち所在皆な是れなり。

○角平獅子かくへいしうし 角兵衛獅子。○詭遇はか 正しくない方法で、財産や地位を得る。○举止しじ 挙措。たちいふるまい。○侷雅かんが みやびやか。○士林しん 讀書人。○得失とくしつ 長所と短所。○叢裏そうり 草むらの中。○多情たふじやう 移り気。○倒鳳顛鸞うちほうてんらん 男女のむつみ合うさま。○所在しぜん 至るところ。どこでも。

現代語訳

小六(柳橋)

昔、北越に角平というものがあって、いつも小さな獅子頭を頭にかぶって踊っていた。いわゆる角兵衛獅子で、その伎芸は今でも東京にのこっている。身のこなしが敏捷で、とんぼ返りをしたりする

から、子供には大受けた。柳橋に角平という名の半玉がいた。小柄で動きが敏捷だからだ。角平はまだ十六歳にもならないのに、先輩の芸者衆と同列の扱いを受け、名を改めて小六となった。大抵の芸者は客の身分とか見た目のよさで、その扱いを手加減するが、それは身入りの多寡につながるからだ。ところが、六はそうしたことに無頓着で、平然と酒をすすめている。そういうわけで、かえって客からは評判がよいのだが、それがときに芸者連中にはおもしろくないので、疎んじられることになる。悪口ばかりで、滅多によくいわれない。何とも気の毒なことだ。近ごろどこかの店で六を見かけたが、それは容子がよくて、しつとりとした気品があった。それはもう、角平時代とは大違いだ。若い妓が大成するか否かは、まったく予想がつかないものだ。

読書人の人物評は難しいものだが

花街の綺麗どころの品評となるとさらにむづかしい

客から言わせれば芸者の移り気はいただけでない

とは言え、可愛い女というものは移り気なので、そこがまた面白いのだが

評に云う。角兵衛獅子の芸の中一番の見所は、逆立ちである。手が足となり、足が頭となる。今から八、九年も前になるか、新橋や柳橋には逆立ちを得意にする若い妓が多かった。逆立ちしても、着物がはだけることもなく、びたっと止まるのだ。まったく見事な芸であったが、昨今ではすっかり見なくなつた。しかし真夜中の男と

女の闇の軽業ならどこにでもある。

頭評

①落想奇甚

落想、奇なること甚だし

②斯戲善倒立側起欲躑不躑欲轉不轉觀者目眩魂奪蓋小六之所以名意亦在此歟

この戯、善く倒立し、側起す。躑つぎかんとするも躑かず。転ばんとするも転ばず。観る者、目眩み、魂奪たまげはる。蓋し小六の名つくる所以、意も亦た此に在らんか。

○落想Ⅱ着想。

現代語訳

①着想が奇抜で素晴らしい。

②この芸は、逆立ちと、とんぼが見所だ。倒れそうでも倒れず、転びそうでも転ばない。観ていると目まいがして、魂が奪われそうだ。小柄であるところから付けられた小六という名は、軽々として敏捷な身のこなしから付けられたのであろう。

小三（新橋）第八十四号

円臉にして修眉。これを望んで白き者、誰と為す。余、その名を知らず。呼んで白地藏といふ。後、その名を問へば、乃ち小三なり。

小三、肌膚白皙にして、濃粉塗飾、故に皚皚、夜を照らす。余、諸れを浮屠氏に聴く。「地蔵尊は慈悲、好んで人を救ふ。故にこれに賽する者多し」と。小三、多情多術、千變万化、痴客呆郎、金錢を擲げうつて艶福を祈る者、陸続、断へず。則ち目して地藏と曰ふ。適稱と謂ふべし。本年五月十三日の夜、小三、情人と難に木挽坊に罹り、幾ど縲纒の辱めを蒙ると云ふ。余、聞く、城北の地、受縛地藏なる者有り。小三も亦たこれに類する無きを得んや。

不知甕国有新粧 知らず 甕国 新粧有るを

粉白脂紅塗抹忙 粉白 脂紅 塗抹忙し

誰道櫻桃花可愛 誰か道ふ 桜桃 花愛すべしと

枝頭枝底竟無香 枝頭 枝底 竟に香無し

評に云ふ。徳川氏の時、賭博を嚴禁す。捕吏百方搜索して、一月、縛に就く者、百余人を下らず。而してその巨魁は安然として無事。累々、繩に繋がる者、皆な良民。一誤再誤のみ。今の粉頭朱唇、縛を被り、恥を蒙る者、此に類する無きを得んや。未だ軽がるしく毀るべからず。

○円臉||ぼつちやりした丸顔。○修眉||形のよい眉。○肌膚||はだ。

○皚||照らす。美しい。○浮屠氏||浮屠は仏陀。仏徒。僧侶。○陸続||続いて絶えないさま。○木挽坊||木挽町。現在の歌舞伎座周辺で銀座と築地の間の地域の旧町名。○縲纒||縲は累の異体字。罪人を縛る繩。牢獄につながることを。○しばられ地藏||茗荷谷の林泉

寺にある。あるいは、葛飾区水元の南藏院か。○甕国||甕国夫人。楊貴妃の三番目の姉の封号。生まれつきの美貌で、天子の前に出るときにも化粧をしなかつたという。○粉白||白粉。転じて美人。○脂紅||脂膩。口紅など。○粉頭朱唇||白粉を塗った顔と、紅をさした唇。小三のこと。

現代語訳

小三(新橋)

ぼつちやりした丸顔と、かたちのよい眉。遠くから見て色白の者は誰であろう。わたしは、その芸者の名前を知らないのだが、白地蔵とよばれているらしい。後で聞くと、それは小三だという。小三の肌は、透き通るように白いのに、濃い目の化粧をするそうだ。だからその白さは夜目にも目立つのだ。私が仏徒から聴いたところでは、「地藏尊は慈悲深く、よく人を救済するので、お地藏様を信仰する人は多い」と。小三は情があつて芸も達者だし、客あしらいももうまい。したがつて誰もかれもが、金に糸目をつけず通つては、小三をものにしようとするらしく、客足が絶えないそうだ。つまり生き地藏様というわけだ。うまいこと名付けたものよ。今年の五月十三日の夜、木挽町で小三は情人と一緒にいたところを襲われ、まるで縄付きのようなはずかしめを受けたという。聞く所によると、城北の方の寺に、しばられ地藏というのがあるそうだが、小三も似たような格好にされたということか。

あの甕国夫人がお化粧をすることがあるのかどうかは知らない

が

小三は白粉や口紅を塗りたくって、それは氣ぜわしいことだ

桜桃は花だけを愛でればよいと誰もがいう

枝や幹には何の香りもないのだから

評に云う。徳川時代では博奕は嚴禁されていた。つねに博奕場は踏み込まれ、一と月に百人以上の人々が捕縛されていた。それなのに親分が縛にもつかず、平然としていて、次々と捕まるのは小者ばかり。お上は何度も同じ誤りをくりかえしていたのであった。小三が受けた災難も、これと似たようなもので、逢瀬を樂しむがごとき些細なことであつたのだ。軽々しく人をそしるものではない。

頭評

①傳粉抹朱自是佳頃有不施朱粉者自誇其潔而黑醜露面猶以為不汚顏色者比之東施傲鬻余最惡之

白粉を傅つけ、朱を抹するは、自らは佳し。頃ろ朱粉を施さざる者有るは、自らその潔を誇る。而るに黒醜、面を露はし、猶ほ以て顏色を汚さざると為す者は、これを東施の傲鬻あうびんに比す。余、最もこれを惡む。

②妙諺

妙諺なり

○傳粉抹朱ふふん 白粉を塗り、紅をさす。○東施 美女の西施に対する

ありきたりの女性。○傲鬻 西施が顔を顰める姿をみて、女性たちが美女に見えるかと、真似して顔を顰めたといふ故事。

現代語訳

①白粉を塗り紅をさせば、見栄えが良くなる。近頃お化粧をしないのもいるが、それは自らその潔い美しさを誇っているのである。ところが色黒の醜女がそのままの顔を見せて、おまけに化粧もしないとなれば、これは西施の鬻め顔を真似した女どもと五十歩百歩で、私はこういう手合いは願ひ下げた。

②見事な諧謔。

小鈴（柳橋）

往年、亀兒なる者有り。籍を柳橋に掲ぐ。余、これを見るに及ばずして、従良す。蓋し商戸島某、一朝、奇利を獲、数百金を擲げうつて擁し去ると云ふ。本年花時、小鈴なる者を、友人の宴に見る。姿容瀟洒たり。主人曰く、「是れ即ち亀兒なり。良人、家道頓に衰へ、復た阿嬌を金屋に貯ふる能はず。これをして再び狹斜に墮せしむ。その薄命も亦た哀しむべしと為す」と。余、曰く、「この子、氣尖に、情多し。人の為に箕帚を奉ず。恐らくは任る所に非ず。若しこれをして長く花柳場裏に在らしめば、則ち必ず一大家を成すを得ん。其の幸不幸、未だ諸れを今日に判すべからざるなり」と。主人、莞爾として微笑す。未だ知らず、余の品評、果して当を得るや否や^①。

淡淡蛾眉拂得新 淡淡たる蛾眉 払ひ得て新なり

為誰開笑為誰顰 誰が為に笑ひを開き 誰が為に顰す

可憐人似路傍柳 可憐の人は似たり 路傍の柳

折去折来還作春 折り去り 折り来つて 還た春を作す

評に云ふ。巨商奪ひ去り、反つてその名を成す。蓋し一去一來、同じく火坑裏に在りて、生活す。或は顯官の夫人と為り、或は豪家の嫡婦と為る。名は則ち尊し。称は則ち美なり。而して一慵惰放逸ようだの女子為るに過ぎず。校書と為りて、美を酒肆茶房に博するに孰若いざれぞ。漁史の説、易ふべからざるなり。

○箕帚人の妻になることの謙遜のことば。○任たえる。○私に捨てる。ぬぐう。きよめる。○為誰開笑誰が為に笑ひを開き。「黄檗宗禪語」百花春至為誰開。○可憐かわいかわいそう。不憫。○火坑くわい苦しい境地のたとえ。

○慵惰ようだなまける。○孰若いざいざれぞ。

現代語訳

小鈴 (柳橋)

昔、亀児という芸者がいて、柳橋で看板を上げていた。私は、亀児に会う機会がないままに、結婚したという。相手は商人の島某といい、一朝にして巨額のあぶく銭を得たので、数百円をポンと出して亀児を連れ去つたらしい。今年の花見の時分、小鈴と名のる芸者を、友人の宴席で見かけたが、垢抜けた上品な女であった。友人は「これが亀児ですよ。旦那が商売に失敗して、屋敷に住まわせることができなくなり、柳橋に舞い戻らせたというわけ。運が開けたと思つ

ていたのに、気の毒なことです」という。私はこれを聞いて言つてやつた。「この妓は気性がかつて、移り気だから、おとなしく家庭の主婦をつとめるのは、向いていないのかもしれない。むしろこれから先、花柳界に身をおいたなら、きっと出世するに違いない。この妓の不幸をこの場で判断するのはいかがなものか」と。友人は私の話を聞いて、にっこりと微笑んだが、さて、私の推測の当否はどうであろうか。

再び美しい眉を描くようになったが

これからは誰に笑みをふりまき、誰に顰め顔をみせるのか

気の毒な女は道ばたの柳の姿のようだ

人に枝を何度も折られながらもまた春を迎える

評に云う。成金が女を身請けし、それで女は名をあげた。そうして一度は去つたが、また戻つてきた。前と同じように苦界に身を沈めて暮すのだ。かりに高官の夫人となるか、豪商の正妻におさまつたとする。どちらにしても、ご立派な地位であり、奥様然として結構なことではあるが、反面、怠惰でだらしない女になりさがつたに過ぎないとも言える。芸者となって花柳界でもてはやされるのと、どちらがよいのかしら。柳北君の考えは、当を得ているように思える。

頭評

① 妙論確論凡評妓者當如是觀

妙論なり。確論なり。凡そ妓を評する者は、是の如く観るべし。

現代語訳

① 絶妙で的確な文章だ。芸者を品評する者は、このように観察するべきであろう。

春吉（新橋）第八十五号

余が友某子の上毛に遊んで帰るや、疾駆三十里、一日にして新橋に達す。新橋より家に抵る、僅かに半里、而して両昼夜を消す。人皆なこれを怪しむ。噫、情杀人を牽く、夷の所思に匪ず。某子の淹留、蓋し春吉の為なりと云ふ。春吉、容貌端然、氣平かに、言寡く、その品格頗る高し。而して茵席の間、蓋し測るべからざるの妙技備有りて、存せん。某子、色に飢ゑたる者に非ず、而して独り眷々、是の如きは、その尋常痴呆女子と臭味を異にするや、必せり①。

聞説前年豊緑珠 聞説らく 前年 緑珠を喪ふと

石家後閣夢魂孤 石家の後閣 夢魂 孤なり

好抛金谷金千鑑 好し 金谷の金千鑑を抛つて

鮫室珊瑚贖一株 鮫室の珊瑚 一株を購はん

評に云ふ。万金を挙げて、虚牝に擲つは豪拳豪致なり。然れども一段の殺風景を覚ゆ。某氏、独り一姫に眷々たり。殆ど風流場中の一敵手。漁史、豈に軽視すべけんや。

○上毛かみつゆの上毛野の略。上野国（群馬県）をいう。○疾駆三十里この文章が書かれた明治十二年（一八七九）当時、群馬県までは鉄道

はなかつた。上野から高崎・前橋まで開通するのは、明治十七年（一八八四）である。三十里は百二十キロだから、新橋まで一日で走り抜けるのは人力車で乗り継ぐしかなく、かなり困難であつたらう。

○情糸こ恋する者同士の心をつなぐ目に見えない糸。○匪夷所思こ「易経・渙卦」。夷は常人。（英雄のすることは）常人の思う所に匪ず。

○淹留こ一つところに留まること。○茵席こしとね。しきもの。○眷眷こ恋慕うさま。○臭味こ同類。○緑珠こ西晋の荊州の地方長官・石崇の愛妾の名。転じて美人をいう。○石家こ石崇の屋敷。○後閣こ

閣は奥の部屋。ねや。○金谷こ上記石崇の別荘の金谷園。○千鑑こ一鑑の千倍。大金をいう。鑑は春秋戦国時代の目方の単位で、二十四両。○鮫室こ南海にいるという妖怪・鮫人の住むところ。○虚牝こ人気がない谷。牝は谷。「韓愈・贈崔立之評事」有似黄金擲虚牝。

○豪拳こ男気のある振る舞い。

現代語訳

春吉（新橋）

私の友人の某子が上毛に出掛けて帰るにあたり、三十里の道のりをたつた一日で新橋に着いたという。ところが新橋から自分の家までほんの半里にすぎないのに、何と二昼夜かかったそう。まわりの人たちは、呆氣にとられてしまったのだが、やれやれというか、女への想いがそうさせたので、普通はこうはしないであろう。某子を足止めさせたのは、どうやら春吉のせいらしい。春吉は器量よしでしたっかり者、氣立てはおだやかで、口数もすくなく、まことに上

品な人柄だ。となると、寝間の手管が、男心を魅了しつくしてとりにすることなのか。それにしても某子は好色漢とは言えないのに、そこまで惚れ抜くというのは、ふつうの頭の足りない女とは、きつと違ったところがあるということである。

むかしのことだが荊州の長官であった石崇が、愛妾緑珠を喪つた

そこで石崇は屋敷の寝間で独り夢を見ることになった

こうなつたからには、金谷園の財宝を使い果たして

はるか南方の海に棲息するという妖怪から珊瑚の一株を買い求

めよう

評に云う。大金を谷底に抛り投げることは、いかにも男らしく豪快な振る舞いにみえるが、何だかひとときわ無風流に感じられる。某氏の一途に女に執着しているさまは、花柳界の好敵手になるかもしれない。柳北君よ、これはうかうかしてはおられませんぞ。

頭評

①従不經意處見出破綻漁史之眼光殆如大炬水底光恠鬚眉皆露可畏故意を経ざる処より破綻を見出す漁史の眼光は、殆ど大炬の水底に光るが如し。鬚眉の皆な露はるるを恠しむ。畏るべきかな。

○経意処注意を向けない処。○破綻破れほころびる。○大炬大たいまつ。○鬚眉男子。男子の美しさは鬚と眉にあるとかが

えられてきた。

現代語訳

①人が見過ごしがちなところに破綻を見つける柳北さんの眼光は、大たいまつたいまつの光りが水底まで届くがごとくだ。男の性ぶらを暴露ばくろしている。余人の及ぶところではない。

浪吉(柳橋)

浪吉、其の姉島八と声名、一時、二州じゅうしゅうに噪なぐ。人呼んで賽二番と云ふ。而して其の容姿を評すれば、滄浪の水は清冽にして、海島の潮は遠く及ばざるなり。方今、柳橋、老妓と雛鬢ともに富めり。若し笄年けいねん以上、三十以内にして色芸有る者を求めば、僅々三五名のみ。浪吉は則ちその一なり。①この子、嘗て軽佻、喜んで俳優者流と遊び、大にその声価を損ず。頃日、頓にその非を悔い、着意老実、賓客を待つ。山石子、余が為にこれを言ふこと詳らかなり。②

吊影孤鸞轉自憐 影を吊ふ 孤鸞 転た自ら憐れむ

愁容對鏡却嬋妍 愁容 鏡に對して 却つて嬋妍

如今相思人何處 如今 相思 人 何の処ぞ

征袖秋寒北海天 征袖 秋は寒し 北海の天

評に云ふ。豪客は是れ浄、俳優は是れ旦。校書、身を失ふ、亦た是れ一戲場のみ。豪客、才略を以て巨財を博し得て、これを校書に擲つ。校書、媚術を以て工に粉資を偷み、これを俳優に失ふ。俳優は則ち其の伎を以て資を積み、財を聚む。その貌を以て色を肆にし、行を

縦はしこまにす。蓋し天上の歓楽、俳優、極と為す。亦た奇ならずや。

○二州武蔵(武州)と下総(総州)の国境で、両国のことだが、ここでは両国と目と鼻の先にある柳橋をさす。○賽優劣を競う。くらべる。○二喬三国時代の美女姉妹。大喬と小喬。○滄浪水の青い色。↓滄浪之水清冽楚辭・漁父辭「滄浪之水清兮 可以濯吾纒」。○笄年女子がはじめてかんざしを挿す年。十五歳。○着意気を付けること。注意。○老実老練で堅実なこと。○山石子未詳。「岩」のつく姓か。○吊とむらう。○孤鸞連れ合いを失った鸞。配偶者を失った人のたとえ。ここでは情人の旅に出た役者待つ芸者。○転た。いいよ。ますます。○愁容悲しむよう。悲しむ顔つき。○嬋妍顔かたちの美しくあでやかなさま。○征袖旅人。○浄敵役。中国の劇で主要な悪役をいう。○旦女形。中国の劇で女性に扮する役者。○失身身をもち崩す。○一戯場清の康熙帝の聯句にある。「日月燈、江海油、堯舜生、湯武旦、曹莽外、未外浄脚、天地一大戯場」。○才略才能と知略。○粉資化粧代。○肆ほしいまま。

現代語訳

浪吉(柳橋)

浪吉は姉の島吉とともに、ある時期、柳橋界限で名を大いに売った。美人姉妹としてさわがれたものである。その容姿はというと、滄浪の水が清く澄んでいるようなもので、他の芸者たちの及ぶところ

はないのである。近頃の柳橋は、年増とかけ出しの若い妓ばかりで、十五歳以上、三十歳以下で、容色と芸事の両方を備えている芸者は、わずかに三人から五人程度であろう。浪吉は当然、其の中に入る。ただ、以前の浪吉は腰の軽いところがあつて、他の客をさしおいて役者連中と遊び回っていたので、大いに評判を落したものだ。近頃になつて、これではいけないと反省し、言行に気をつけておとなしくおさまつて、上客に声をかけられるのを待つている。という話を山石氏がわざわざ私に詳しく語ってくれたのだ。

情人の面影を追つて女はいやまに悲しんでいる

鏡に映つた憂い顔にこそかえつてその美貌がにじみでている

今このときお慕いしたお方はいずこにおられるのやら

北の彼方の旅先は秋も深まり寒気がみなぎつていことだろう評に云う。芝居で言えば、お大尽の客は敵役、役者の客は女形。芸者が身を持ち崩すというのも世の中は芝居小屋のようなものだ。お大尽は才覚で巨万の富を獲得して、その財で芸者を買う。芸者は色仕掛けで金を巻き上げ、その金を役者につき込む。役者はその演技力で金を稼ぎ、一財産を築く。役者はその美貌を看板にして色気でせまり、芸者をもににする。つまり天上の歓楽を、役者が独り占めにするというのはまた不思議なことではないか。

頭評

①一網打盡何等大膽騷壇月日非漁史決不能發此語

一網打盡、何等の大膽。騷壇の月旦、漁史に非ずんば、決して此の語を発すること能はず。

② 夫然豈其然
夫れ然らば豈に其れ然らん。

○ 騷壇Ⅱ文壇。文人の社会。騷は詩歌・風流の意。○ 決Ⅱ決の俗字。現代語訳

① 一網打尽に評するとは、何と大胆なことだ。柳北漁史でなければ、決してこのような評語を発することはできない。

② そうなら、きつと、そうなのであろう

小照 (新橋) 第八十六号

其の色を^{たの}しみ、其の才を負^{たの}み、傲然、客を^{あなど}慢る者は、東京妓流の陋習なり。余、毎にこれを厭ふ。新橋の紅裙中、絶へて其の習無き者を求むれば、則ち首に小照を推す。照、極めて敏慧、其の客に待す、常に欣欣如たり。適ま暴客^{たまた}醜児、衆裙皆な額を^{はじめ}蹙し、眉を^{しめく}顰す。顧て照の面を視すれば、亦た欣欣如たり。蓋し忍耐の力、人に過ぐる者有るなり。友人某子、照を愛し、小飲することに、必ずこれを召す。嘗て余に謂ひて曰く、「吾の照における、其の色を愛するに非ず。唯だ其の一団の和氣を愛するのみ」と。余も亦た間然する無し。

呼做溫柔自有因 溫柔と呼び做す 自ら因有り
凜如霜雪素非眞 凜として霜雪のごとき 素と眞に非ず

裙釵中有程明道 袖釵中 程明道有り
満座春風太可人 満座の春風 太だ人に可なり
評に云ふ。溫和柔順、是れ婦女の第一徳義。況んや客に接し、賓に對するにおいてをや。彼の才貌を憑恃し、高く自ら標置する者、吾れ何の意なるを知らざるなり。

○ 負Ⅱたのむ。負持はたのみにする。○ 欣欣Ⅱ喜び楽しむさま。○ 醜Ⅱ狂う。酒に酔つて狂う。○ 蹙額Ⅱ額にしわをよせる。蹙は、せまる、皺をよせるの意。○ 一団Ⅱひとかたまり。○ 間然Ⅱ欠点を指摘して、非難するさま。○ 程明道Ⅱ北宋の学者・程顥の呼び名。弟の程頤とあわせて二程子といわれた。濃厚な人柄で、多くの人に慕われた。

現代語訳

小照 (新橋)

自分の美貌や技芸を鼻にかけ、おつにすまして客を馬鹿にするとするのは、東京の芸者の悪い習慣である。私はこういう芸者を見るたびに嫌な気になる。新橋の芸者連中のなかで、この悪習に染まっていないのを探すと、まず第一に小照があげられる。小照はとても利口者で、宴席に侍つてもいつもにこにこしている。かりに悪酔いして暴れる客がいると、大半の芸者は顔をしかめているだけだが、小照だけはにこにこ顔を崩さない。忍耐力が人並みはずれているのだ。友人の某氏が小照を鼻ににして、酒席には必ず小照を呼ぶ。

ある日、かれが言うには、「わたしが小照を鼻屑にするのは、色気よりも、宴席をほんわかしたきぶんにさせる人柄なのさ」と。これに私は私も異議をはさむことは少しもない。

おだやかな人柄といわれるのには、自然と理由がある

つめたい霜や雪のようにきりつとしてるのが、本当に立派な
のかしら

芸者連中のなかにも、温和で知られた程明道のようなものがない
て

宴席に春風が吹き渡るように、ひとびとを楽しませてくれる

評に云う。温和で柔順であるのが、婦人の美德だ。となれば、客商売の芸者なら当然そうでなくてはならない。美貌と技芸を鼻にかけ、えらそうにしている芸者を見るたびに、そんなことをしなくてもよいのにと、思ってしまう。

頭評

①色不必美才不必奇傲慢倨傲蔑視賓客所在皆是然客亦有自取之者不可不知也

色は必ずしも美ならず、才は必ずしも奇ならずして、傲慢倨傲、賓客を蔑視する、所在皆な是れ然り。客も亦た自らこれを取る者有るは、知らざるべからず。

現代語訳

①容色が美しいわけではなく、才気がすぐれているわけでもないの

に、おごり高ぶり、えばりくさり、お客を見下すというのは、どこでも皆なそうである。客の方も、自分からそういう態度をとるとい
うのは、知っていなくてはならないことだ。

阿栄（柳橋）

阿栄、甫め十歳、容姿絶美、余、窃かに異日、狭斜の状元と為る者は、必ずこの子なるを期す。内子も亦たこれを受す。遊ぶ毎に、これを拉く。然れども栄は、緘黙にして、言はず。唾兎と一般、未だ嘗て其の顔を解くを見ず。余、内子とこれをして一笑せしめんと欲するも、百方にして笑はず。乃ち目して雛褒姒と為し、竟にこれを舍つ。後ち七、八年を経て、これを某樓に見る。栄の容色豹変、余の曾て期する所と大に異なり。余、これに戯れて曰く、「姐々、言はず、笑はず、猶ほ往昔に同じきや」と。栄、微莞するのみ。その沈沁寡言、毫も幼時に異ならず。余、帰りにこれを内子に語る。内子曰く、「胡瓜の初めて厨に上るや、人皆な珍賞す。既に長ずれば、復た尋常菜蔬と異なる無し。栄も亦た類する無きを得ん」と。余、為に一噱す。

金羽凋殘舊夢醒 金羽 凋殘して 旧夢醒む

憶曾柑酒訪雛鶯 憶ふ 曾て柑酒 雛鶯を訪ねしを

樊籠養汝徒勞耳 樊籠 汝を養ふ 徒勞のみ

斷送三春竟不鳴 三春を斷送して 竟に鳴かず

評に云ふ。三年鳴かず、一鳴、人を驚かす。此れ等の伎倆、亦た男子漢を籠罩する一大圏套なり。然れども雛鬢の能く及ぶ所に非ず。

豈に学んで習はざる者か。

○甫_レヤつと…になつたばかり。○異日_レ後日。○状元_レ科挙に一
番で及第した者。○内子_レここでは柳北の妻をいう。○緘黙_レ口を
とじる。○百方_レ種々の手立て。○雛褒姒_レ褒姒は周の幽王の寵姫。
笑つたことがなかった。○姝々_レ姉、または女子の敬称。○微莞_レ
ほほえみ。○沈沈_レ物静かなさま。○嚙_レわらう。○金羽_レ金は美称。
羽は雛鳥の羽。○凋残_レ草木がしおれる。枯れて傷む。つかれおと
ろえる。○柑酒_レみかん酒。○樊籠_レ鳥獸を入れるおりやかご。転
じて、自由を束縛する境遇のたとえ。○三年不鳴。一鳴驚人。○史
記_レ滑稽伝「三年間飛ばず鳴かずにいる鳥は、ひとたび飛ぶと天ま
で上がり、ひとたび鳴けば人を驚かす」というたとえ。○籠罩_レ魚
を捕らえるかご。ひとまとめにする。○圈套_レ策略。わな。○学而
不習_レ「論語、学而「学而時習之、不亦説乎」。

現代語訳

お栄(柳橋)
お栄は十歳にして抜きんでた美貌であった。私は将来、柳橋で一
番の芸者になるのは、この子であろうと、ひそかに期待していた。
私の妻もまたお栄を最良にしていたから、いつも柳橋ではお栄を呼
んでいた。ところが、お栄は座敷に出て、口を閉ざして何も言わ
ない。まるで聾啞の子供のようで、顔をほころばずのを見たことが
なかった。私は妻と二人でお栄を笑わそうとして、あれこれやっ

みたが、笑ってくれない。これでは子供の褒姒だということ、お
栄を呼ぶのはやめにした。それから七、八年が過ぎて、ある料亭で
お栄を見かけた。お栄の容貌はすっかり変つてしまい、むかし期待
したのとは全く違つていたのである。私はからかつてこう言った。「お
栄さんよ、だんまりのむつつりは、昔とちつとも変らないのかい」と。
お栄はわずかに微笑むばかりで、物静かで口数の少ないこと、少し
も子供の頃と変らないのだ。私は家に帰つてこのことを妻に話した
ところ、妻はこう言った。「胡瓜がはしりの時期に食卓に出ると、誰
もが珍しがつて賞味します。でも、時が経つと、普通の野菜とちが
いはないということになつてしまふのと同じで、お栄さんもその口
ヨ」と。私はそれもそうだと大笑いしたものだ。

金色の羽もすっかり色あせて、昔の夢はやぶられた

おもえばみかん酒をたずさえて子供のお前を訪ねたものだが

籠の中の鶯のようにお前を育てたのは無駄だった

三年経つてもとうとう鳴くことはなかったのだ

評に云う。三年も鳴かないでいたものが、いきなり鳴き声をだしたら、
皆な驚くであろう。こういう手管が男どもをとりこにする、大きな
仕掛けなのだ。でもそういうことは、この若い芸者にはできなかつ
たのだ。学んだだけで身につかなかつたということだろうか。

頭評

①余嘗讀式亭三馬所著鬚鬚夜話載白鬚祠官某奉使鬚黒公儼然不笑公

命諸臣百計解頤某容貌益嚴有一人請公出金百兩置之某前某唾然大笑不可止然則榮未見白金耳若見之某大笑絶倒不知如何也

余嘗て式亭三馬の著はす所の鬚鬚夜話ひげのつやを読む。載するに、白鬚祠官某、鬚黒公に奉使するも、儼然として笑はず。公、諸臣に命じて、

百計、頤を解かしむ。某、容貌、益す嚴なり。一人有りて、公に金百兩を出すを請ひ、これを某の前に置く。某、唾然として大笑し、止むべからず。然らば、則ち榮、未だ白金を見ざるのみ。若しこれを見れば、その大笑して絶倒すること、如何なるを知らざるなり。

②慧心靈舌殆使乃公辟易數里

慧心、靈舌、殆ど乃公をして辟易せしめんとすること數里

○鬚鬚夜話はのひげ 本作は式亭三馬の作ではなく、その息、式亭小三馬の『春日長鬚鬚野話』。式亭小三馬 文化九年(一八一二) 嘉永六年(一八五三)、合巻作者。○白鬚祠官 向島の白鬚神社の社人。○鬚黒公 作中では「ひげのないぜんさま(髭の内膳様)」。○解頤 笑わせる。○乃公 目上の者が目下の者に対していう自称。○辟易 したじろぐ。

現代語訳

①私は、以前、式亭三馬の著である『鬚鬚夜話』を読んだ。その中に、白鬚神社の社人である某が、鬚黒公に奉使したところ、かしこまるばかりで笑わない。そこで鬚黒公は家来に命じて、あの手この手で笑わそうとしたが、某の顔はますますこわばるばかりであった。すると一人の家来が鬚黒公に百兩の金を出してもらい、その金を某の

目の前に置いたところ、某は大声で笑いこらげて止まらなかつた。うな。そうであるならば、お榮はまだ百兩の金を見たことがないだけである。もしこれを見たら、大笑いして笑いこらげてどうなるか、わからないのである。

②読みの深さと表現のうまさとは、小生なんぞのはるかに及びも付かないものである。

阿福(新橋) 第八十七号

その貌を女にして、その神を男にし、胆大にして機智有る者、新橋の妓団に出づ。その名を阿福と曰ふ。福、原と福松と称す。往年、某氏の為に贖はれて小妻と為る。その家を治むる、甚だ嚴なり。内外の事、一にその手に出で、主人は拱黙するのみ。本年某月、福、復た狹斜に入る。余、その鏡破るの故を知らざるなり。新橋の紅裙、無慮百名、一個の機変、畏るべき者無く、唯だ福や畏るべし。余が友、美木子、喜んで福と遊ぶ。余、窃かに卜す、異日、必ず一大波瀾を情界中に起こすこと有らんを。『易』に云く、「内陽にして、外陰、内健にして、外順」は福の謂ひか。

春艷秋芳 縦ひ看るべきも

経來霜雪 総て凋残す

賞心別様 蒼勁を愛す

一朶水仙 能く寒に耐ゆ

評に云ふ。苦界の情波、愈よ深く、愈よ妙なり。箇裏の甘酸を經歷

する者に非ざれば、殆ど言ひ易やすらざる。一味平淡、尋常婦女子に異ならざれば、豈に自家宅裏うちに兀坐くわつざして、婢子を啗殺むらうころするにしかんや。

○神かみ魂たま。心。○小妻こつまめめかけ。○拱黙こうもく。両手を胸の前で重ねて、黙っている。かかわらないこと。○鏡破かがや。夫婦が離別すること。○機変かへ。たくらみ。臨機応変の処置。○内陽而外陰うちがは。『易経』泰たい・象伝しやうでんに「内陽而外陰、内健而外順」とある。○春艶秋芳はるあやみあきかほ。春の花々と秋の花々。○凋残しうぜん。草木がしおれる。○賞心しょうしん。広く物を賞美する風流な心。○別様べつよう。別の様相。○着勁ちやくきん。ものさびて古く、勢いの強いこと。○一朶いつた。一枝。朶は枝。○情波じやうは。異性への慕情を波にたとえた語。○箇裏かんと。このなかに。心のうちに意識しながら、ことばでそのものを表現できないときに言うことば。○兀坐くわつざ。姿勢正しくすわる。○婢子べいし。女子供。○啗殺むらうころ。啗はさえずる。殺は助辞、笑殺のように。

現代語訳

お福(新橋)
容貌は女つぽく、気持は男みたい、肝がすわって機転がきく、こんな芸者が新橋に出ているそうだ。その名はお福、初めは福松と呼ばれていた。以前、某氏に身請けされて妾となった。福は、妾宅では家計を始末して、きびしくとりしきり、家のすべてを一手に引受けて、主の出る幕はなかったという。それが、今年になって、お福はまた新橋に舞い戻ってきた。私は、なぜ離縁されたのか、わけは知らない。新橋にはおよそ百人からの芸者がいるが、事に及んで動

じずに身の置きどころを心得ている者は、お福をおいて他にはない。私の友人の美木子は、このところしばしばお福を呼んでいるようだが、ひそかに思うに、いつか必ずお福が、新橋の花街をおどろかすような一波瀾を起こすような気がしてならない。『易』に、「内が陽で外が陰、内が健で外が順」というのは、お福のことか。

春のはなばな、秋のはなばな、それぞれ見るに価するが冬になって霜や雪にあたれば皆しおれてしまうものだ

風流人には別の見方があって、冬になってもしつかりしている花を愛でる

一枝の水仙の花は、寒気の中で凜として咲きほこっているのだ評に云う。花街での男女の情のあれこれは、奥深く妙味のあるもので、酸いも甘いも噛み分けたものでなければ、言葉につくせないのだ。味も素つ気もないそこいらの女どもではないのだから、家の中でふんぞりかえって、使用人や子供に当たり散らすようなことは出来ないのだ。

頭評

① 錦繡其容貌糞土其心情世多有其人矣表裏一轍内外同途寧可望之妓女乎

その容貌を錦繡にし、その心情を糞土にするは、世に多くその人有り。表裏一轍、内外同途、寧ろこれを妓女に望むべけんや

② 比喩極妙

比喩、極めて妙

現代語訳

①表の顔を美しくして、その心意は糞土のようであるというのは、この世界にはたくさんいる。表も裏もなく筋が通り、内も外もなく分け隔てがないというのは、どうして芸者に望むことができようか。
②この喩えは、絶妙だ。

小蝶（柳橋）

「節去り蜂愁ひて蝶知らず、曉庭還つて遶る折残の枝。二州橋畔、幾個の莊周。情夢、既に醒め、而して小蝶、猶ほ栩栩然として春を恋ふ。痴耶、狂耶、余、未だその是非を判ずる能はず。小蝶の名、明治初年に噪ぎ、今既に老ゆ。而して猶ほ妙年の妓流と短長を争ふ。故に往往、遊客の愛を失ふ。蓋しその才と貌とを恃むの過ちなり。吁、三郎帰り来り、夕暝、蜚飛ぶの日、梨園弟子、復た前日嬌絶の態無し。而して猶ほ自ら催花鼓を搥ち、以て春光を督促せんと欲す。難いかな。」
夢裏三春容易過　夢裏　三春　容易に過ぐ

戀花蛺蝶患情多　花を恋ふ　蛺蝶　情の多きを患ふ

粉衣秋薄西園夕　粉衣　秋は薄る　西園の夕べ

冷露凄風奈汝何　冷露　凄風　汝を奈何せん

評に云ふ。飄忽滅没。寓意測れず。蓋し解すべく解すべからざるの間に在り。人をして神爽やかに、氣清からしむ。亦た是れ一篇、異様の文字。

○節去り……節は重陽。「鄭谷・十日菊」節去蜂愁蝶不知　曉庭還遶折残枝　自縁今日人心別　未必秋香一夜衰」。○莊周〓ここでは莊子の「胡蝶の夢」を踏まえている。○栩栩然〓喜ぶさま。うっとりするさま。○三郎帰り来り〓三郎は玄宗皇帝をさす。「白居易・長恨歌」帰來池園皆依旧」。○夕暝蜚飛ぶ〓「白居易・長恨歌」夕殿蜚思悄然」。○梨園弟子〓「白居易・長恨歌」梨園弟子白髮新」。○催花鼓〓花を咲かせる鼓。唐の玄宗が、園中でその愛玩する鞞鼓を鳴らしたとき、百花が開いた故事。○搥〓太鼓を打つ。○三春〓春の三ヶ月。孟春（二月）仲春（二月）季春（三月）。○蛺蝶〓蝶の総称。○粉衣〓蝶をあらわすか。○西園〓李白・長干行「八月胡蝶來　双飛西園草」。○秋薄〓秋が近づくこと。○飄忽〓軽くてすばやいさま。たちまち。○滅没〓ほろんでなくなる。

現代語訳

小蝶（柳橋）

「重陽の節が過ぎたが、蜂はそのことを愁い、蝶は知らぬげだ。夜明けの庭に折残した菊の花をもとめて蝶は飛び回っている」。両国橋の畔では、朝帰りの遊郎たちが、よい夢をみた気分も醒めて、そろそろ歩いている。それなのに、小蝶は夢のつづきのままに、うれしうに春の到来を待ち望んでいる。その有様は、愚かなのか、狂っているのか、私にはその判断がつかない。小蝶という名前は、明治の初めのころには大いに売れていたが、今では過去の話だ。老いてなお小蝶は若い芸者たちと張り合っている。だから時に客たちに愛想

をつかさされる。自分の才氣と美貌を自負するが故の間違ひである。長恨歌を引くまでもなく、玄宗皇帝が宮殿にもどると庭園ははもとのままで、夕暮の宮殿に螢が飛んでいたが、梨園の役者たちには、かつての華やかさは望むべくも無く、それでもなお玄宗皇帝が催花鼓をならして春の花々を咲かせようとしても、到底かなうことではないのだ。

夢のなかで春はあっさり過ぎてしまつた

花から花へと恋多き蝶はしよこりもなく飛び回る

いつの間にか秋がしのびより夕暮時の庭は

冷たい露が降り烈しい風が吹き抜ける、蝶よ薄い羽衣でどうする

評に云う。時をおかず、すべては消え去る。作者のそうした意味合いは憶測しにくいのが、分るようではないという、そのあわいにあるのであろう。そこからは、心爽やかで、清々しい気分を味わうことができる。この文章もまた、人には真似のできない独特なものがある。

頭評

① 又大有韵致是以神勝者

又大いに韻致有り。是を以て、神勝る者なり。

② 風神婉約如見鏡中之花水裏之月

風神、婉約。鏡中の花、水裏の月を見るが如し。

○韵致Ⅱ風流な趣。風致。○風神Ⅱ気品。おもむき。○婉約Ⅱ。現代語訳

① この文章にも風趣があり、そのため心豊かになる。

② 気品があり、たおやか。鏡に映つた花、水面に映つた月をみていようだ。

幸吉(新橋) 第八十八号

幸吉、破瓜の年より、木酋氏の為に眷愛せられ、稠繆多年、殆ど侍姫と一般。故に他客と疎なり。新橋、この妓あるを知らざる者、亦た多し。頃歳、故有りて、山河の誓渝り、旧情、頓に絶す。曲中、これを憐れむ。然れども、幸吉、天資活達にして、金屋の海棠は蓋し其の本色に非ず。若し夫れ水中の浮萍の飄逸にして、致有るは、以て其の雅品を称するに足るなり。一友余に問うて曰く、「脱帽解衣、槃礴して酒を飲むの際、召して杯杓に侍するは、新橋妓中、誰か最も好き」と。余、曰く、「幸吉なるかな」と。幸吉これを聴きて懼ばず。以て己を貶すと為す。然れども、余が言、評に非ず。狭斜に老ひる者、必ず此にこれを知るべし。

緑珠非復石家人 緑珠 復た石家の人に非ず

紅拂未遭楊氏賓 紅拂 未だ遭はず 楊氏の賓

月老於卿恩太薄 月老 卿に於て 恩 太だ薄し

花鈿今日爲誰春 花鈿 今日 誰が為に春なる

評に云ふ。浮萍浪蕩は、妓流の本色。固より当然たるのみ。これを

金屋に蓄ふるは、猶ほ彩籠に禽を養ふがごとし。人、自ら以てこれを愛すと為す。知らず、渠れ以て苦界と為すを。諺に所謂、「蓮草、摘む勿れ、野色、自ら佳なる者（テニトルナヤハリノニオケレンゲサウ）」と。漁史、これを得たり。

○破瓜ハカ瓜ハカの字を分けると、「八」の字が二つになるところから、八の二倍で女子の十六歳の称。○木酋キシュ榎キの字がつく姓か。○稠繆チウミウミウなれしたしむこと。むつみあうこと。○山河誓カハカヒ永遠不変の誓い。○金屋海棠キンウタイカウ海棠はなよなよした美人の形容。立派なお屋敷でお姫様扱いされること。○槃礴パンハク両足を前に投げ出して座るさま。○誣ウそしる。○緑珠リクシュ西晋の石崇の愛妾の名。石崇の危機に際し、自決する。○石家シヤカ石崇の屋敷。○紅払ベニハラヒ中国唐代の伝奇小説『虬髯客伝』の登場人物。隋の重臣・楊素に仕えていた下女・紅払は、楊家の没落を見抜き、流れ者の李靖を主人に選んだ。李靖は後に唐王朝建国の功臣となる。○楊氏の賓ベイン李靖をさすか。○月老グヱウラウ縁結びの神。媒酌人。○卿ケイ第二夫人の代名詞。○花鈿ケイデン唐代、女性の頭の裝飾品。はなかんざし。○春ハル男女間的情欲。○浮萍浪蕪フヘイナウキ浮草が集まりかたまっているさま。

現代語訳

幸吉（新橋）

幸吉は十六の歳には、榎さんにぞっこん惚れられて長年睦まじいことたるや、まるで側女と同じであつた。だから他の曇肩客がなく、

新橋では幸吉という芸者を知らない客が多かつたのである。近頃はわけあつて、永遠に変らぬ誓いがかわり、旦那の愛情もすっかり色あせたそう。新橋の花街では誰もが気の毒がつている。けれど幸吉はもともとさっぱりした性格で、何不自由のないお屋敷暮らしなど、もともと向いていなかった。水に浮かぶ浮草のような自由気ままな暮らしにも趣があるように、芸者にもどつても不足はないのだ。友人の一人が、私に尋ねた。「帽子をとり、服を脱ぎ、くつろいだ格好で酒を飲むとして、呼んでお酌をしたらうのに、新橋なら誰が一番だと思ふ？」と。私の返事は、「そりゃあ、幸吉だろう」と。ところが幸吉はこれを聴いてもちつとも嬉しそうにせず、自分のことをけなされたと受取つたようだ。しかしながら、私は悪くしつたつもりはない。花街で歳を重ねる芸者は、これを知つておくべきである。

お前は緑珠のようにもう石崇の家人ではなく、

しかしまた紅拂のように楊氏の賓客である李靖にまだ出会つていない

縁結びの神様もお前には恩恵を施していないようだ

花のような美しいかんざしを挿してお前は今いつたい誰のために春の粧をしているのであろうか

評に云う。浮草暮らしは、芸者の本質で、あたりまえのことだ。だから芸者に屋敷暮らしをさせるのは、かえつて籠の鳥にさせるようなものだ。芸者を身請けする者の多くは、そうとも知らず、愛すればこ

そと思ひ込んでゐる。囲われた芸者の方は、花街にいたときよりかえつて苦界を味わうことになる。ことわざに言うではないか。「手に取るなやはり野に置けレンゲ草」と。柳北君はそれを言いたかつたのだ。

頭評

①如蒼鷹脱鞵何等快活

蒼鷹の鞵を脱するが如し。何等の快活。

○蒼鷹Ⅱ鳥の名。鷹に同じ。○鞵Ⅱ鞵。たかぬき。鷹狩りのとき、鷹を止まらせるための腕をおおう革製の道具。

現代語訳

①鷹狩りの鷹が、獲物を狙つて飛び立つときのような、何とも快活な文章である

小常(柳橋)

初め余、小常の良妓たるを識らず。嘗て友人と二州妙年の妓を品評す。皆な嘖嘖として、その美、且つ慧を称して措かず。余、試みに一再これを招く。美は則ち美なり。慧は則ち慧なり。然れども、子細にその品位を看來れば、かの嘖嘖に副はざるに似たり。余、疑うて諸れを某生に質す。生曰く、「公、過てり。かの二州青年の妓流、美且つ慧なる者有りと雖も、亦た各々一癖有り。驕傲に非ざれば、則ち

輕蕩。狡黠に非ざれば、則ち洪鈍。而して常や癖無し。是れ良妓たる所以なり。余、乃ち服す。

秋波來往若何情 秋波 來往 いかなる情ぞ

多病人憐太瘦生 多病の人は憐れむ 太瘦生

一部閨箴君莫說 一部の閨箴 君 説く莫れ

河誓山盟任他成 河誓 山盟 他の成すに任す

評に云ふ。少年、妓を喜む者。誤りて驕傲を以て高雅と為し、狡黠を以て靈敏と為す。口を極めて稱賛す。便ち狡者は益す狡。傲者は益す傲。殊に憫笑すべし。余、嘗て謂ふ。「今の妓を聘するは、以て酒を侑むるに非ざるなり。自ら卑しうして、以て憐を求むるなり」と。妓の 傲且つ狡なる、豈に恠しむに足らんや。

○嘖嘖Ⅱ口々にやかましくうわさするさま。○措Ⅱやめる。○一再Ⅱ一、二度。○驕傲Ⅱおごり高ぶつて、ほしいままに振る舞う。○輕蕩Ⅱ輕薄で放埒。しまりのないさま。○秋波Ⅱ美人の澄み切つた目もと。色目。○太瘦生Ⅱはなはだ瘦せていること。○閨箴Ⅱ閨房でのいましめ。○河誓山盟Ⅱ海誓山盟。不変の愛の誓い。

現代語訳

以前、私は小常が良い芸者であることを知らなかった。いつだったか、友人たちと柳橋の若い妓の品定めをしたことがある。それぞれ、口々にあれは美人だ、あいつはかしこいなどと、きりがいい。私は、試しに幾人かの若い妓を呼んでみたが、美人と言われれば美人だし、

かしこいと言われればそう見える。しかし、よくよく人柄を観察すると、みんながほめそやすほどには、納得しかねるところがあった。私はそのあたりが腑に落ちないので、ある人に聞いてみた。その人が言うには、「お前さん、それは違うよ、そういう柳橋の若手の芸者連中なんというものは、美人であろうと、利口者であろうと、それぞれに難点があるもので、気位の高いのがあるかと思うと、軽はずみでだらしのないものもある。小ずるいやつがいれば、のろまのぼんくらもいる。ところが小常にはそうした難点がない。これが小常が良妓である理由なのだ」と。私は成るほどと感じ入った次第である。

色目をつかって行ったり来たりするのはどんな気持からだろうか

病みがちな人は身の細るのをかなしむものだ

男女のことは色々あるけれど、抛っておけばよいではないか

お互いが好きであればそれでよいのだ

評に云う。芸者遊びを好む若い者は、気位の高い芸者に出会うと、上品な人柄と勘違いするし、ずるがしこい芸者には要領が良い女だと見そこなう。そうしてよせば良いのに、ほめそやす。そんなことをすれば、狡い芸者も、気位の高いのも、ますますつけあがるばかりだ。まことに憫むべきだ。私は言ったことがある。「今時の客は、芸者を呼んでお酌をさせるのではなく、わざわざ自分からへりくだって、芸者をおだてる」と。これでは芸者が、つけあがるのも当然である。

頭評

① 確論精論

確論にして精論

現代語訳

① 正確で精密な議論である

小光（新橋）第八十九号

貌、美なる者は、才に蓄しよくなり。才、富める者は、貌かに虧かく。偶なま才貌、兼ねて全き者有れば、則ち軽浮にして、静寂ならず。余、頃ちかじろ、一妓を新橋に見る。淑しよくにして秀、これを楼主に問へば、曰く、「是れ二世小光なり」と。余、曾てその姉を識る。亦た有名の校書為り。然れども、光の嬌艶敏慧に及ばず。時に友人蜜子、座に在り、余に語りて曰く、「僕、渠かの姉と旧有り。故にこれを妹視す。且つ渠かれ静婉、亦た一個の可憐兒。兄、幸いに渠が為に佳伝を撰べ」と。余、笑ひて諾す。乃ち相ともに拉して舟に上り、流に遡つて二州に達し、小酌、飲を尽して別る。余、窈かに其の拳止を審するに、間然すべき者無きなり。方今、新橋の後進、名望有る者は、素より寥寥ならず。然れども、静寂の二字を下し得る者は、独りこの子に在るか。蜜子、果して吾を欺かざるなり。」

風懷雖老未全殘 風懷 老ゆと雖も 未だ全く残せず

每對佳人意轉歡 佳人に対する毎に 意 転うたた歡ぶ

江月江烟無限好 江月 江煙 限り無く好し

金絃休爲儂彈 金絃 惜しむを休めよ 儂が爲に彈ずるを
評に云ふ。漁史、校書の爲に、一評語を下す。能く明眸皓齒をして、
頓に声価を増さしむ。齋に連城のみならず。宜べなるかな、寧子の
爲にこれを請ふなり。然れども、小光、此の佳評を得て、恐らくは
阿姉をして懊惱せしめん。寧子、それこれを侮る無きを得んか。

○齋〓おしむ。ひかえめにする。○虧〓かける。○寧子〓未詳。○
寥寥〓寂しくて静かなさま。○風懷〓風流な胸のうち。みやびやか
な心。○残〓そこなう。ほろぼす。こわす。○明眸皓齒〓美しい眸と、
白い歯。美人のこと。○連城〓連城之壁。戦国時代、趙の恵文王の持っ
ていた宝玉。秦の昭王が十五の城と交換しようとしたので、この名
がある。

現代語訳

顔の美しい芸者は、知恵が足りないし、知恵がある芸者は顔に難
点がある。たまたま知恵と美貌を完全に兼ね備えた芸者がいても、
軽佻浮薄で落ち着きがない。私は最近、新橋である芸者に出会ったが、
これがおしとやかで、美人ときているので、店の主人に聞くと、こ
う言った。「これは小光の二代目ですよ」と。私は以前、先代の小光
を知っていたが、これもまた売れっ子の芸者であった。でも、今の
小光の色つぼくて頭の良いのには及ばない。友人の寧君と同席した
時に、彼が言うには、「僕は小光の姉とは古い馴染みだから、小光は
妹分のように見ているのさ。おまけに小光はたおやかで物静か、と

ても可愛いじゃないか。お前さん、小光のために一肌脱いで、小光
のことを書いてくれないだろうか」と。私は笑って承知した。それ
で寧君と一緒に小光を連れ出して舟を雇い、大川を遡上して柳橋に
出掛け、酒を飲みながら大いに楽しんで別れた。その席で小光の仕
草をそれとなく見たものだが、まったく文句のつけようがなかった。
ところで今時の新橋の売れっ子の若手芸者は、もとより少なくとも
いい。だからといって、静寂の二文字で呼び得るのはこの小光だけだ
ろうか。寧君はやはり私を騙さなかつたのである。

風流を楽しむ気持は老いたりといえども昔のままだ

美人に会えれば気分が高揚するのはあたりまえ

川面に映る月影とあたりに漂う霧の景色を見ているとたまらな
くなる

いつまでもこうしていたいから、糸の音は絶やさないでしてくれ
評に云う。柳北君は芸者のために、この評語を書いた。おかげでこ
の美人はにわかには評判が上がった。これはもう、連城の宝玉に匹敵
するとうだけでない。寧君が小光のためにこの評語を柳北に請う
たのもっともなことだった。とはいえ、小光は柳北君に誉めても
らったとしても、先代の小光に悔しい思いをさせるのではないか。
寧君はそれを後悔せずにはすまないだろうね。

頭評

①不磨之論

不磨の論
現代語訳

①不朽の論である

梅吉（柳橋）

竹外の一枝、嫩蕾に香動く。是れ梅花、精神極妙の処。若しかの爛漫、雪に化し、鉄笛聲裏に狼藉飛舞するの時は、則ち桃李と何ぞ扱ばん。梅吉、蓋し此れに類する者か。①その初め雛鬢為る、曲中、嘖嘖としてその美を称し、その慧を誉む。陞りて大妓と為るに及んでは、則ち名声、前日に如かず。退きて、小清、愛子の下に立つ、甚だ怪しむべし。賞鑑家の言に曰く、「梅児、沈静寡言、恬淡、自ら甘んず。是れ竟に盛名を得ざる所以なり」と。それ或は然らん。梅吉は阿久の妹なり。而してその天質、遠く姉の右に出ず。世、必ず林連の愛を継ぐ者有らん。余、未だその人を識らざるなり。②

幽芳應是避紛華

幽芳 應に是れ紛華を避くるなるべし

林下風香獨自誇

林下の風香 独り自ら誇る

唯惜樹身殊矮小

唯だ惜しむ 樹身 殊に矮小

竹籬遮得不看花

竹籬 遮り得て 花を看す

評に云ふ。女校書、本より是れ筵席間の弄玩物。猶ほ花を観、鳥を聴き、以て耳目を欣ばしむるがごとし。謂ふ所の沈静恬淡、これを良家に求むれば、則ち可なり。これを妓流に責む、豈に左せざらんや。その装い、静好模様を做す者、以て痴漢を瞞過すべし。而して真正

才子を欺くを得ざるなり。

○嫩蕾Ⅱ若い蕾。○鉄笛Ⅱ鉄製の笛。○嘖嘖Ⅱ口々にほめそやすさま。○賞鑑Ⅱ人物・書画・骨董などを目利きする。鑑定。○林連Ⅱ北宋の詩人。博學で詩書に巧みで、梅と鶴を愛し西湖の孤山に隠れて、終身仕えなかつた。○幽芳Ⅱおおくゆかしい香り。ひっそりと咲いている花。しとやかな美人。○紛華Ⅱはではなやか。美しいこと。○左Ⅱたがう。くいちがう。○静好Ⅱ穏やかで巧みなこと。○瞞過Ⅱだますこと。

現代語訳

竹藪の近くの梅のひとつの若い蕾に、香りが漂う。こういう時こそ、梅の花の生気が絶妙になっているのだ。そうして花が満開になり、雪のようになって鉄笛声裏に飛び散るさまは、もう桃や李の花々と少しも変りがないくらいだ。梅吉はちやうどこの梅の花のように見える。まだかけ出しの少女のころから、柳橋では評判の美人芸者であり、才気が喜ばれた。ところが年が進んで年増になると、若かつた頃の評判にかけりが見え、小清や愛子の下風に立つようになつてしまつたのは、どうしてだろう。事情通に言わせると、「梅吉は物靜かで口数も少なく、さっぱりして、自分からそれで好しとしている。これでは評判も落ちてしまうのは当然だ」という。その通りかも知れない。梅吉はお久の妹であるが、しかし資質においては姉よりもはるかにすぐれている。世間には、梅を愛した林連のような人物が

いて、いつか梅吉を鼻屑にしてくれるに違いない。私には、誰がそうするのは、分らないけれど。

ひっそりと咲いている梅の花は、きつとはでやかさを避けているのであろう

林の方からよい香りが風につてくるので、梅の樹があるのがわかる

惜しむらくはその梅は背だけがとくに低いので

竹垣にさえぎられて花をみる事ができないのだ

評に云う。芸者というのは本来、宴席で客の好みに合わせるのが仕事であるから、花をながめたり、鳥の鳴声に耳をかたむけたりする風流の楽しみごとと同じで、客の気分をよくしてくれなくてはならない。だから妙に物静かでさらっとしているというのは、良家の子女ならいざしらず、芸者の態度としてはいただけなのだ。その出でたちも、とりすました様子では、ありふれた客ならなんとかなるが、風流才子には通用しないものである。

頭評

①好箇譬喩氣韻獨絶

好箇の比喩、氣韻独絶

②甚麼賞鑑家恐不過以暗黙爲沈靜以呆痴爲幽閑

甚麼の賞鑑家、恐らくは暗黙を以て沈靜と爲し、呆痴を以て幽閑となすに過ぎず。

○好箇||ちようどよい。○独絶||独り特に優れている。○甚麼||どんな。何。

現代語訳

①びつたりの比喩、氣韻生動し卓越している

②どのような鑑定家であろうか。恐らくだんまりを沈靜と受け取り、呆けているのを奥ゆかしいとしているのに過ぎない。

千代松(新橋)第九十号

余、二橋の小鬢を見るに、多くは是れ泥偶を弄する^的痴^が女子のみ。偶^{また}ま怜悯、喜ぶべき者有れども、亦た往往にして狡^{こう}黠^{かく}に流れ、動もすれば客に逼りて器玩を買ひ、飲食を求め、乞^き丐^{がい}一般の模様を為す。甚だ厭ふべきなり。①新橋の雛妓、千代松、才貌共に富み、而して酒間、興を助くること老妓に譲らず。蓋し後進の領袖為る者なり。若し悪習に染まず、以て成立に至らば、則ち上等の勲位を領得すること、豈に難からんや。今夏、余、友人と舟遊^{ふねあそび}竟日。帰途、衆妓皆な倦み、或は睡り、或は黙す。松、独り快弁諛語、大いに寂寥を破る。人をして舟の新橋に達するを覚えざらしむ。諸子、その儻拔^{ようはく}に服す。爾来、宴会有る毎に、必ずこれを聘すと云ふ。

燦然一笑捧觸來 燦然一笑 觸を捧げ来る

座客愁眉爲汝開 座客の愁眉 汝が為に開く

恍看秋波漾明月 恍として看る 秋波の明月を漾はすを

風神應是在瑤臺 風神 応に是れ瑤台に在るべし

評に云ふ。この子、較やや人意を強くす、真個に妙妓。又た云ふ。個は是れ妓人の真面目、新柳二橋、許多あまたの校書、都すべて是れ驕婢悍婦きょうひはんぷ。絶つへて這般こはんの人品を見得ず。甚麼じんもの名士雅流、色界の餓鬼、酒裏さかの饑客きやくに過ぎず。一個いっの那裏なりのの道理を鮮得する没し

○泥偶どい泥人形。○痴獸ちじゅう獸はおろか。○器玩きばんおもちゃ。愛玩用の道具。○乞丐きぎ兒にこじき。○竟日けいじつ一日中。○偶拔ぐはつ偶は俊。飛び抜けていること。○秋波あきなみ秋の波。また、美女の美しい眼光。○明月めいげつ明月にたとうべき珠の名。○漾やう漂う。水にゆらぐ。○風神ふうしんおもむき。風采。○瑤台やうたい玉で飾った高殿。月の異称。○人意にんい人の心。○驕婢悍婦きょうひはんぷ礼儀のない女中。気の荒い女。○這般こはんこのような。○甚麼じんもなに。どんな。○饑客きやく饑はむさぼる。○那裏なりのこのどのへん。どこ。那辺。○鮮得せんとくわずかに得る。○没ぼつない。打消しのことば。

現代語訳

千代松（新橋）

私が新橋柳橋の若い妓を見るにつけ思うのは、大半は泥人形で遊んでいような子供じみた女ばかりだということである。たまに利巧りくそうな妓がいると嬉しくなるのだが、そういうのに限つて、往々にして狡賢くわうけんく、なにかにつけ客にねだつて、欲しい物を手に入れ、飲食をたかり、まるで物もらいのようなありさまで、甚だ厭うべきである。新橋の若手芸者の千代松は、器量も技芸も人並はずれており、

宴席では座を盛り上げて、年増芸者もたじたじだ。したがって若手芸者の筆頭といつてもよく、このままで道はずすようなこともなくて歳を重ねれば、きつと新橋一の名妓となるのも、難しいことではあるまい。この夏、私は友人たちと一日、船遊びに興じたが、帰りの船では大半の芸者がぐたびれて眠りこけ、あるいはおし黙っていたが、千代松だけは快活にしゃべりまくり、冗談を飛ばして大いに船中をにぎやかにしてくれたから、いつの間にか船が新橋に着いたことも気づかないほどであった。友人たちは千代松の座持ちのよさに感服したものだ。それからというもの、宴席があるたびに、必ず千代松を呼んでいるという。

とつておきの笑顔をふりまいて酒を注いでまわる

宴席の誰もがお前の愛嬌あいけうでにこやかになる

うっとりとしてその明月のような澄みきつたまなざしをみつめると

お前の風采はあたかも月の御殿ごてんのなかにいる美女のようだ

評に云う。千代松には少しく人を元氣にするところがある。ほんとうに素晴らしい芸者だ。ついでに言えば、こういう態度こそが、芸者本来のあり方といえる。新橋柳橋の花街には、いくらでも芸者がいるけれど、すべてが驕り高ぶつた気の強い女たちだ。近頃は千代松のような人品にんぴんいやしからぬ者が見当たらない。どのような名士雅流みやうしやたちも、色呆しきだまけの大酒飲みに過ぎない。その辺りの道理を理解している者など、一人もないのである。

頭評

① 狀得雛妓狡黠面目逼真何等絶妙

狀、雛妓の狡黠を狀し得て、面目、真に逼る。何等の絶妙。

② 筆氣飄逸墨痕欲滴漁史得意之筆

筆氣、飄逸。墨痕、滴らんと欲す。漁史、得意の筆

○ 狀言葉や絵であらわす。

現代語訳

① この文章は、若い芸者のこずるさを捉えており、その生體は真に
 せまつている。何という見事な描写だ

② 筆使いは才氣横溢、瑞々しさにあふれている。柳北君の得意な文
 章である。

阿今(柳橋)

千代松と年齒、相俦^{ひび}しく、容姿も亦た相敵する者、これを柳橋に求
 むれば、則ち阿今一人のみ。蓋し千代松は豊腴^{ほうゆ}、牡丹の如く、阿今
 は纖麗^{せんれい}、早桜の如し。各の風致を異にす。而して能く客の愛を獲る
 は一なり^①。阿今、雛籍に在りと雖も、その技倆に至りては、業^{わざ}に已
 に老成。故に艶聞、往往にして曲中に播き、大妓皆な瞠若^{ちやうじやく}、目して
 可畏^{かゐ}兇^{けい}と為す。評者、或は云ふ。「阿今、舞踏に長じ、絃歌に短なり。
 故に大妓為るを欲せず、情人を求むるに急なるは、蓋し早を趁ひて
 従良を謀るならん」と。この評、果して当るや否や^②。

情芽雖嫩太風流

情芽 嫩^{わか}しと雖も 太^{はな}た風流

能解歡悰能解愁

能く歡悰を解し 能く愁^{しみ}を解す

生怕柳腰如個瘦

生怕^{せいばく}す 柳腰 個の如く瘦す

何縁禁雨又禁風

何に縁りて 雨に禁^かへ 又た風に禁^かへん

評に云ふ。小今、貌、酷だ小清に似たり。靈慧も亦たその人に似たり。

謂ふ所の梁山泊の嬌賊なる者。宜なり、其の畏るべきの評有るや。

○ 年齒^{ねんじゆ}年齒。○ 豊腴^{ほうゆ}豊に肥える。○ 業^{わざ}すでに。○ 雛籍^{ひなせき}一人

前でない芸者。○ 瞠若^{ちやうじやく}若^{わか}く。驚きあきれて目をみはるさま。○ 情

芽^め恋の芽生え。○ 歡悰^{かんじゆ}よろこび。悰^{じゆん}はたのしむ。○ 生怕^{せいばく}ひと

く心配する。○ 小今^{せういま}阿今の誤植か。○ 靈慧^{れいゑ}ふしぎなほど賢いさま。

現代語訳

お今(柳橋)

千代松と年格好が同じで、容貌も好敵手という若い芸者を柳橋に
 探すとなれば、則ちお今だけであろう。さて、千代松はふつくらと
 した体つきで、牡丹の花のようであり、お今はほつそりとした美人で、
 咲き始めの桜の花のようである。二人とも、そのおもむきを異にする
 が、客受けは抜群だ。お今はまだ一枚看板ではないが、客あしら
 いや芸芸においては、すでに出来上がっている。したがって色恋の
 噂は柳橋中にひろがり、名妓といわれる姐さんたちからも一目わか
 れ、別格の成長株と見なされている。ただ事情通が言うには、「お今
 は踊りは上手いが、唄や三味線がもう一つ。だから一人前の芸者に

なろうとは思っていない。早く情人を得て、早いところ身を引いて、結婚したいのではないかと。この批評は果して当っているかどうか。

恋の芽生えは、それが幼いものであれ大いに風流なものだ

恋すればこそ喜びの情も哀しみの情も分つてくる

お今の柳腰はいかにも瘦せていて心配だ

なにを頼りに雨風に耐えていくのであろうか

評に云う。お今の容貌は、小清にそっくりだし、賢いこともよく似ている。お今はいわゆる梁山泊の女賊徒のような者だが、「畏るべき」という評があるのももつともだ。

頭評

① 僕嘗一識此妓織麗之語果知其非謬評

僕、嘗て一たび此の妓を識る。織麗の語は、果して其の謬評に非ざるを知る。

② 技倆老成豈童筵席所謂可畏児之評必有所原也

技倆の老成、豈に童に筵席のみならんや。いわゆる「可畏児」の評、必ずもつとつく所有るなり。

○ 織麗 〓 ほんりして美しい。○ 原 〓 もとづく。

現代語訳

① 私は以前からこの芸者のことを知っている。この芸者を評するのに「織麗」の語を用いるのは間違っていないことがわかる。果して

それがその通りなのを知っていたのだろうか。

② 手管が老成しているというのは、宴席のことだけではない。いわゆる「可畏児」の評は、きつと基づく所が有るのである。

(跋)

僕、近人の艶話を讀むに、往往、妓流に及ぶ。一味称賛して、美貌を説き、才情を語る。一篇の文字、幽閑貞静、婉淑貞順等の陳熟語を填めて、以て章段を為すに過ぎず。題を掩ひてこれを讀むに、知らず、その今人爲るや、古人爲るや、一人爲るや、兩人爲るや、千人爲るやを。譬ば猶ほ三家村裏の俗舞のごとし。只だ一副の面具有るのみ。漁史の此の篇、筆を用ひて活発靈動。一篇、自ら一篇の主意有り。一人、自ら一人の情態有り。描し來りて真に逼り、模し出して神に入る。上は北里志・平康記に比すべく、下は以て板橋雜記・呉門画舫録に比すべし。其の他、白門新柳記、十洲春語は、則ちその後に瞠乎たり。昔は俳諧師其角、吉原源氏五十四君伝を作る。筆筆變化、措辞絶妙。惜しむらくは文字鄙俗、語、雅馴ならず。才人文士の爲に賤しむる。今、漁史、百余年の後に生まれ、即ち此の著有。其角をしてこれを讀ましめば、贊嘆激賞、果して何如ぞや。

己卯冬日 秋風道人識

(情譜一篇畢)

○ 一味 〓 ひたすら。○ 幽閑 〓 閑かで奥ゆかしい。○ 貞静 〓 「詩経・

周南「幽閑貞靜之徳」。操が正しく、物静か。○婉淑ニ美しくてやさしい。しとやか。○貞順ニ操が堅く柔順なこと。○陳熟語ニ陳は古い。使い古された熟語。○三家村ニ家が三軒しかないような片田舎。○一副ニ一揃い。○面具ニ仮面。○北里志ニ唐の孫榮そせいの書。唐代・長安の北方・平康里にあった遊郭を描いた。○平康記ニ宋の張邦基の『汴都平康記』。○板橋雜記ニ金陵(南京)の花街遊里の風俗を描いた、清の余懷の著。○呉門画舫録ニ清の西溪山人の著。○白門新柳記ニ清の許養和の著。○十洲春語ニ清の二石生の著。○吉原源氏五十四君伝ニ書名に「伝」はない。吉原の遊女評判記。基角は豪商紀伊国屋文左衛門のとりまきであった。○雅馴ニ文章や言葉が正しくて素直なこと。

現代語訳

近頃の艶ばなしを読んでみると、大体は芸者の噂話である。ひたすらべた誉めしてその美貌を説き、才情を語っている。一篇の文章の中に、幽閑貞静、婉淑貞順などと使い古された熟語をならべて、文章をでつち上げているに過ぎない。表題を見ずに読んでみると、今の妓なのか昔の妓なのか、一人のことなのか、二人のことなのか、或は千百人のことなのか、見当もつかない。譬えて言えば、片田舎の粗野な舞いのように一揃いのお面があるだけだ。それにひきかえ、柳北君のこの篇の筆使いには、いきいきとした躍動感がみなぎり、それぞれの篇ごとに主題が明確に表わされ、とりあげる芸者ごとに、その面貌や心情がそのままに描かれて真にせまり、まるで神業だ。

古くは『北里志』や『平康記』を思わせ、新しきは『板橋雜記』や『呉門画舫録』を髣髴させる。その他では、『白門新柳記』や『十洲春語』は、この篇の後塵を拝している。昔、俳諧師の基角が『吉原源氏五十四君伝』を著わしており、変幻自在で絶妙の言葉使いの逸品だが、惜しいかな表現が俗に落ちて、雅趣がない。したがって風流韻士から品がないとおとしめられているのだ。さて柳北君は基角の百余年後に生まれて、この著作を成した。基角居士にこれを読ませたら、感動して絶賛するに違いないと思うが、果してどうだろうか。

己卯冬日

秋風道人識す

(情譜一篇おわり)